

## 序 文

昭和13年9月13日、橿原遺跡の発掘調査を契機に末永雅雄初代所長が創立した橿原考古学研究所は、85周年を迎えました。85年の歩みの中で当研究所は、奈良県の遺跡のみならず海外の遺跡の調査・研究にも積極的に関わり、グローバルな視点で人類の過去の営為を解明してまいりました。そうした研究成果は、附属博物館での展示・公開や講演会等を通じて広く社会へ発信しており、本論文集もその一つと位置付けています。

昭和38年刊行の『近畿古文化論攷』を嚆矢とする論文集は、その後5年ごとの刊行を経て、本書で18冊目となりました。今回は常勤・非常勤職員が執筆した34本の論文を掲載し、その内容は考古学をはじめ文献史学や保存科学など多岐にわたります。いずれも今後の学界を牽引するであろう充実した内容となっております。

新型コロナウイルス感染症が永らく社会に大きな影響を与えてきましたが、これまでも幾度となく未知のウイルスに打ち勝ってきた人類の足跡を私たちの調査・研究が明らかにできると考えております。本論文集が、今後の人類の歩みの参考となるような歴史像を構築する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の出版を助成していただきました公益財団法人由良大和古代文化研究協会、ならびに本書の編集・出版をお引き受けいただきました八木書店出版部の皆様に感謝を申し上げます。

令和5年9月13日

奈良県立橿原考古学研究所  
所長 青柳 正規

## — 例 言 —

1. 本書は、奈良県立橿原考古学研究所が昭和 38 年（1963）以来 5 年毎に刊行する『橿原考古学研究所論集』の第 18 冊であり、奈良県立橿原考古学研究所創立 85 周年記念論集である。
2. 本書には、考古学・古代史学・民俗学・保存科学などの論考 34 本を所収した。
3. 本書の構成は、対象とする時期・地域・器物を勘案のうえ配列した。
4. 本書は、公益財団法人由良大和古代文化研究協会からの出版助成を受けた。
5. 本書の編集は、光石鳴巳・東影 悠がおこなった。

# 目 次

カラー口絵

序 文 ..... 青柳正規 i

例 言 ..... ii

ポンペイの誕生 ..... 青柳正規 1

要 旨／1 先史時代／2 イタリア半島の民族と言語／3 ギリシア人とエトルリア人／4 シュノイキス  
モス／5 都市化／6 エトルリア都市論争／7 都市規模／8 交易都市／9 ギリシア時代

植物遺存体からみた黄土高原と中原地域の植物利用 ..... 齊藤 希 12

要 旨／はじめに／1 研究動向／2 問題の所在と研究目的／3 研究対象とする遺跡と植物／4 時期別  
の植物遺存体の構成比／5 考 察／まとめ

X線 CT 計測による大中の湖南遺跡から出土した稲束の形態解明

—穂刈りの実態解明への道を切り開く— ..... 稲村達也 21

要 旨／はじめに／1 材料と方法／2 結果と考察／まとめ—稲束内の大維管束数の変異と刈取り法—

ジョッキ形容器の出現とその背景 ..... 橋本裕行 28

要 旨／はじめに／1 日本列島におけるジョッキ形容器の分布と年代／2 再集成作業で新たに得られた  
知見／3 中国遼寧省出土のジョッキ形陶器／4 弥生時代後期以降のジョッキ形容器出現の背景／まとめ  
にかえて

近畿地域最古銅鐸精査考

—中川原銅鐸と松帆1号銅鐸— ..... 森岡秀人 40

要 旨／はしがき／1 銅鐸の所蔵先と由緒、過去の調査研究／2 中川原銅鐸の観察所見をめぐる考察／  
むすびと予察

銅鐸の鑄掛けについての一考察 ..... 北井利幸 52

要 旨／はじめに／1 鑄掛けの事例検討／2 鑄掛け工程についての考察／まとめと展望

もちほばれた河内の壺

—弥生時代後期における生駒山西麓産広口壺の動態— ..... 西浦 熙 60

要 旨／はじめに／1 弥生時代後期の西麓産広口壺研究略史／2 中河内地域における広口壺の編年的検  
討／3 西麓産広口壺の搬出動態／おわりに

土器に描かれた組帯文

—伴堂東遺跡出土資料を中心として— ..... 杉山拓己 72

要 旨／はじめに／1 伴堂東遺跡出土例について／2 奈良盆地の組帯文系文様／結 語

3D データ解析による泉屋博古館所蔵の建安廿二年(217年)重列神獸鏡の同形2面の検討 —同異形状・鏡面のフィット球・湯口方向・鑄造方法について— …… 三船温尚・廣川 守 79	
要 旨／はじめに／1 本稿で採り上げる資料／2 3D計測と検討方法について／3 検証図について／4 2面の同異点について／5 鏡面の検証／6 2面の鑄造方法の検討／まとめ	
纏向遺跡における鍛冶関連遺物の基礎的研究 …… 水野敏典 89	
要 旨／はじめに／1 纏向遺跡と鍛冶関連遺物の研究史／2 鍛冶関連遺物の出土分布／3 大型砥石／4 111次の出土品／5 174次の鍛冶関連遺物／6 纏向遺跡の鉄製武器／まとめ	
畿内の古墳の石室材と石棺材 …… 奥田 尚 99	
要 旨／はじめに／1 竪穴式石室の壁石に基づく古墳の地域性／2 横穴式石室の石材に基づく古墳の地 域性／3 前・中期古墳における石棺の出現とその石材／4 後期古墳における家形石棺の出現とその石材 ／おわりに	
古代の信仰と神社の成立 …… 米川仁一 109	
要 旨／はじめに／1 日本古来の信仰／2 神道信仰・神社信仰の成立／3 祭神と祀る者／4 神社の成 立と関連遺跡／まとめにかえて	
鏡作神社所蔵三角縁神獸鏡の製作技術に関する覚書… 宇野隆志・清水克朗・清水康二 119	
要 旨／はじめに／検 討／まとめ	
雨の宮1号墳出土の腕輪形石製品 …… 高橋幸治 126	
要 旨／はじめに／1 腕輪形石製品の形態と配置／2 祖型・形の検討／3 規格性が高い車輪石の一群／ まとめ	
近畿地方の盾持ち人埴輪の性格 …… 岡崎晋明 136	
要 旨／はじめに／1 近畿地方の盾持ち人埴輪の出土例／2 盾持ち人埴輪の出土古墳の実態／3 盾持 ち人埴輪の製作／4 盾持ち人埴輪の性格／まとめにかえて	
大倭氏に関する研究ノート …… 豊岡卓之 146	
要 旨／はじめに／1 大倭氏の奥津城／2 市磯(師)考／まとめにかえて	
南の内(宇智)と北の内の古墳群 …… 泉森 皎 155	
要 旨／1 五條地域への歴史の道／2 近内古墳群の概要／3 大型方墳の立地と古墳周辺環境／4 近 内古墳群と社寺、豪族伝承／5 近内古墳群と日本の四大古墳群／6 北の玄関口、男山丘陵の古墳群の性 格／7 まとめにかえて—南の内(宇智)と北の内—	
初期須恵器に見られる地域色 —和歌山県紀ノ川下流域を中心として— …… 木下 亘 165	
要 旨／はじめに／1 横位平行叩き技法の須恵器と出土遺跡／2 横位平行叩き甕の分布から見た流通圏 ／3 底部絞り込み技法大甕の流通圏／おわりに	
大和におけるミヤケの一例 …… 清水康二 176	
要 旨／はじめに／1 曲川町周辺の遺跡概要／2 曲川町周辺の遺存地名とミヤケ、その構成要素／3 「マ ガリのミヤケ」の管掌者／4 「マガリのミヤケ」設置後の変遷と意義／まとめ	

## 古墳時代中期の鉄銚副葬とその背景

—階層間・地域間比較を中心に— …………… 平井洸史 185

要旨／はじめに／1「鉄銚と階層性」にかかわる既往の研究／2 検討の対象と分類／3 倭における鉄銚形態と階層性／4 韓半島南部の副葬様相／おわりに

## 佐紀古墳群東群における円筒埴輪配列

—大型前方後円墳周庭帯の配列変遷— …………… 東影 悠 195

要旨／はじめに／1 コナベ古墳の埴輪配列／2 ウワナベ古墳の埴輪配列／3 ヒシャゲ古墳の埴輪配列／4 佐紀古墳群東群の埴輪配列の変遷／おわりに

## 傍丘磐杯丘北陵と南陵について

—地名と兆域から見た考察— …………… 米田敏幸 203

要旨／はじめに／1 大和国条里復原図による傍丘磐杯丘の検討／2 『延喜式諸陵寮』の兆域記載について／3 顕宗陵・武烈陵の真陵に関する考古学的考察／まとめにかえて—問題の所在—

## 後期大和王権の東国支配

—特に常陸久自国を中心に— …………… 茂木雅博 213

要旨／1 問題の所在／2 国造の支配領域／3 冊封体制下の大和王権／4 大和王権の東国支配／5 久自国王墓の整理／6 久自国王墓の理解

## 五条野丸山古墳被葬者論について …………… 入倉徳裕 224

要旨／はじめに—五条野丸山古墳被葬者論の概要—／1 五条野丸山古墳＝欽明天皇陵説とその問題点／2 五条野丸山古墳＝蘇我稲目墓説／3 五条野丸山古墳の造営年代／4 五条野丸山古墳の被葬者／おわりに

## 藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具と「移動する（渡来系）工人ネットワーク」

—久野雄一郎氏から研究の継続を託されて— …………… 鈴木 勉 235

要旨／1 久野雄一郎氏の研究／2 鑄造技術／3 毛彫りの始まりと技術移転／4 移動する（渡来系）工人ネットワークの存在／5 藤ノ木馬具に関わる技術移転の実像

## 鋤頭型棺釘を用いた飛鳥時代木棺の構造と展開 …………… 中野 咲 245

要旨／はじめに／1 釘付式木棺の復元研究／2 鋤頭型棺釘を用いた木棺の類例と展開／3 鋤頭型棺釘を用いた木棺の系譜／おわりに

## 飛鳥時代後半の終末期古墳における棺と棺台 …………… 岡林孝作 255

要旨／はじめに／1 阿武山古墳の夾紵棺と棺台／2 高松塚古墳の漆塗木棺・棺台に関する知見の整理／3 高松塚古墳漆塗木棺・棺台の復元／4 結語—飛鳥時代後半の終末期古墳における棺形態の系譜—

## 野中寺弥勒菩薩半跏像銘文論 …………… 東野治之 267

要旨／はじめに／1 文体について／2 用語について／3 像の伝来について／おわりに

## 夏見廃寺出土大型多尊埴仏の制作とその背景

—持統朝の仏事— …………… 清水昭博 276

要旨／はじめに／1 夏見廃寺と昌福寺／2 夏見廃寺の埴仏／3 大型多尊埴仏とその銘文／4 「甲午年」前後の仏事／5 大型多尊埴仏と天皇家／まとめ

## 下駄のなかの花鳥風月

—下駄に描かれた精神世界— …………… 本村充保 283

要旨／はじめに／1 施文の種類と施文位置の分類／2 施文の種類及び位置からみた時期的変遷／3 形式別にみた施文の特徴／4 下駄には何が描かれたのか／まとめ

豊後の大神氏と三輪氏と小蛇の神 …………… 田中久夫 291

要旨／はじめに／1 大神氏のこと／2 地方豪族の中央への進出／3 神の氏名／4 美麗しき小蛇／5 三輪の神と賀茂の神の御正体／おわりに

日本列島における<sup>うまやさる</sup>麁猿信仰の起源と『言談抄』所引の『齐民要術』 …… 田島 公 304

要旨／はじめに—麁猿に関する主な研究—／1 文献史料・絵画資料に見える麁猿の実態／2 大江匡房撰『言談抄』に見える麁猿と『齐民要術』／むすび—日本列島における麁猿の起源—

## 飛鳥川上流の村落の宮座

—高市郡明日香村稲淵・栢森のカンジカケ（綱掛）の意味するものと宮座— …………… 浦西 勉 312

要旨／はじめに—飛鳥川最上流の村落—／1 飛鳥川上坐宇須多伎比売命神社と四カ村／2 宇佐八幡における古講と堂講、及び観音堂の修正会と綱掛（カンジョウナワ）／3 飛鳥川最上流の中世のムラから畑郷の成立／4 村の神社の成立と宮座から宮講へ／5 村の神社の宮講の変貌

## 遺跡・遺構移設保存考

—史跡の現地保存の原則に反する事例— …………… 建石 徹 321

要旨／はじめに／1 史跡の現地保存の原則／2 遺跡、遺構の移設事例／3 世界遺産「飛鳥・藤原」登録に向けて—構成資産候補 高松塚古墳・キトラ古墳が抱える課題と展望—／おわりに

付載：奈良県立橿原考古学研究所 5 年間（2018～2022 年度）の主な歩み …………… 329

はじめに／1 発掘調査／2 展観／3 報告書／4 研究紀要／5 研究会／6 科学研究費補助金／7 海外交流・研修

執筆者紹介 …………… 337

# ポンペイの誕生

青柳 正規

## 要 旨

ローマ帝政期の紀元1世紀中頃には1万人以上の住民を擁する都市に発展するポンペイの、その前史ともいえる先史時代からギリシア時代までの推移を概観する。このため、まずポンペイの東側を蛇行するサルノ川が、紀元前5000年ごろの噴火によって押し出された溶岩流によってより南へと川筋を変えたことなどの地形変化を観察する。ついで、現在でも十分には解明されていないイタリア半島の先住民族や外来民族がポンペイとどのような関係を有しているかを考古資料から考察する。そしてエトルリア人とギリシア人の到来によって小さないくつかの集落が合体するシュノイクスモスが起り、交易などによって都市化が開始される。都市的形態を獲得するポンペイの起源がエトルリアに由来するのか否かの所謂エトルリア都市論争にも触れ、最初期のポンペイがどの程度の規模であったのかを考察する。

【キーワード】 ポンペイ ヴェスヴィオ山 サルノ川 オスキ人 サムニウム人 エトルリア都市論争 シュノイクスモス ピテクサイ ギリシア都市

## 1 先史時代

「世界でもっとも美しい海岸線」と讃えられてきたナポリ湾、その奥にそびえるヴェスヴィオ山は現在海拔1281mにすぎない火山である。しかし、海岸からすぐにはじまるなだらかな裾野がしだいに傾斜を増して山頂に至る純粋な標高差のゆえに、高さのわりには堂々とした山容をほこっている。事実、この山はナポリ湾の地形を決定する重要な役割を果たしただけでなくその周辺に住む人々の生活を太古の昔から左右してきた、いわばナポリ湾の主なのである(図1)。

このヴェスヴィオ山周辺とナポリの西に広がるカンピ・フレグレイ(「燃える平地」を意味する)、そしてナポリ湾の沖に浮かぶ島々からなる火山地帯特有の変化に富む景観は、死後の世界にまつわる神話と密接な関係を有していた。地下から湧き出るいくつもの温泉は冥界を流れる火の川フレグトンおよび嘆きの川コキユトスと結びつけられ、アヴェルノ湖は黄泉の国への入り口、ルクリーノ湖は冥界の大河アケロン沼と見なされた。また、イスキア島の硫黄の臭気は神々との戦いに敗れた怪物の身体から発するものと信じられ、大地の揺るぎはやはり神々によって幽閉された巨人たちのあがきのせいと考えられた<sup>(1)</sup>。このような神話のイメージ形成に、火山地帯に生きる人々の火山活動との戦いの記憶が作用したことはいうまでもないことであり、その中核をになったのが

ヴェスヴィオ山である。

ヴェスヴィオ山の山麓南端をふちどるようにサルノ川が流れている。トッレノーネ山中に水源地をもち、ソレント半島の付け根からヴェスヴィオ山の南山麓まで続く湿地帯の海岸を河口とすることには変わりはないが、その間の、とくにポンペイ周辺での川筋は幾度かの火山爆発による噴出物によって次第に南へと川筋を変えていった。いつの時点でどのような川筋であったのかを段階的に証明することは困難であるが、図2に示すようにおそらく紀元前5000年頃にさかのぼるヴェスヴィオ山の大噴火以前はポンペイの北側をほぼ真西に向かって流れ、その噴火の際に流れてきた溶岩によって南に大きく川筋を変えたものと考えられる<sup>(2)</sup>。一方、79年の噴火直前、サルノ川の川筋は図3に示すように、ポンペイからスタ

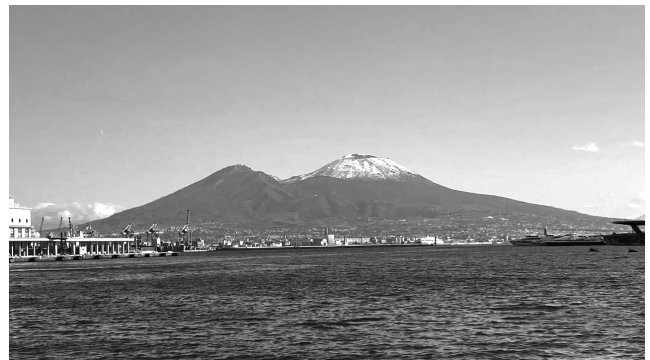


図1 ナポリ湾とヴェスヴィオ山

# 植物遺存体からみた黄土高原と中原地域の植物利用

齊藤 希

## 要 旨

過去の生業形態解明の手がかりの一つに、当時栽培していた植物や周辺に生育していた植物の種類を反映する遺跡出土の植物遺存体があるが、中国考古学では報告事例が依然として少ないことに加え、遺跡間や地域間での比較研究や全体としての傾向の議論が課題として残る。本稿では、いわゆる「中国初期王朝形成期」における中原地域と長城地帯の交流関係を検討するための基礎的情報として、黄土高原と中原地域の植物遺存体データの収集をおこない、植物利用のあり方の時期的変化と地域差について考察した。その結果、アワを主体とした農耕基盤が継続するなかで、立地環境に因りキビの利用を重視する選択が行われたことや、当該地域でのイネの客体性と消費の特殊性、遺跡周辺の草原環境や牧畜の比重の高まりなどの事象がわかった。今後は花粉分析や動物遺存体等の生業形態に関する情報等を統合し、地域間の交流の基盤となる生業形態・生活様式を明らかにしていきたい。

【キーワード】 植物遺存体 中国初期王朝形成期 黄土高原 中原地域

## はじめに

中国の紀元前2千年紀の新石器時代末期から青銅器時代初期は、社会の複雑化が進展し、青銅器や車馬など様々な新技術が出現する「変容」の時期である。また、いわゆる「夏」王朝の成立にはじまり、商・周といった歴代の「中国初期王朝」が盛衰した時期でもある。「王朝」の中心地は主に中原地域に集中するが、中原地域の二里头文化・商文化・西周文化は、周辺の諸文化と複雑に交流関係を持っていたことが知られている。近年では、新たな考古学的発見が相次いだ影響もあり、中原地域からみて北に広がる、「長城地帯」との交流関係が注目されている。これらの交流関係を明らかにしていくことが筆者の研究課題の一つであるが、同時にその背景にある人々の生活様式に関しても検討をおこなう必要がある。特に、基盤となる生業形態の違いは、人間集団の日常的な行動範囲や周辺との交流圏、交易でやりとりされるモノの違いに直結すると考えられる重要な要素である。本稿では、長城地帯の中部にあたる陝西・山西北部および内蒙古中南部の黄土高原地帯から中原地域にかけての地域を中心として、人々の交流の基盤となる各地域・各遺跡の生業形態について明らかにすることを目的とし、植物遺存体の研究データの収集・統合を通じて、植物利用のあり方の時期的変化と地域差について考察する。

## 1 研究動向

過去の植物利用のあり方を知る方法の一つとして、まずは遺跡から出土する植物遺存体から、当時食糧として栽培していた植物や周辺に生育していた植物の種類を明らかにする手法がある。中国では近年、史前時代の農業への関心は高まっているが、その大部分は稲作の歴史についてであり、研究対象も長江流域が多い（李ほか2018）。一方、本稿で対象とする華北地域については、従来アワ・キビを中心とした農耕が基盤であったことが一般的に知られる。遺跡の発掘調査では、時にウォーターフローテーションによる植物遺存体の採集や花粉分析がおこなわれることがあるが、常に実施されるものではなく、さらにそれらの成果を報告している事例はこれまで限定されていた。近年では植物遺存体の調査研究事例が増加するとともに、人骨の炭素同位体比分析に基づきC3植物とC4植物の摂取比、すなわち栽培植物の食糧依存の程度を明らかにする研究など、新たな手法を用いて人々の植物利用の実態へアプローチする研究も発展した。

趙志軍は、中国先史社会における植物利用について、西北地区から長江下流域までの地域を網羅的に扱い、それぞれの地域での既存のデータからどのような植物利用が行われて、どのような時期的変遷をたどったかについて、簡潔にまとめている（趙2020a・2020b）。これによる



# X線CT計測による大中の湖南遺跡から出土した 稲束の形態解明 —穂刈りの実態解明への道を切り開く—

稲村達也

## 要 旨

弥生時代の初期水田稲作における栽培管理の実態解明は、考古学や歴史学の発展ばかりでなく、現在まで続く水田稲作の高い生産性と持続性の解明に資すると考えられる。当時の稲の刈取り実態を現すと考えられる穂の形態学的特徴を、大中の湖南遺跡から検出された出土稲わらブロックのX線CT画像を用いて、現代の稲を対象とした穂のサイズと関係する大維管束数に関する研究成果に基づいて解析した。稲束内から大維管束数を計測する部位である穂首節間が262本検出され、これらは穂から少なくとも150mm下で穂刈りされたものと推定された。そして、穂首節間の大維管束数の頻度分布および稲束内における大維管束数別の穂首節間の配置の空間変動解析から、出土稲わらブロックは大維管束数が8~10個を最大とする複数の稲系統が混在した稲束を3個まとめて結束した可能性を示唆していると判断された。

【キーワード】X線CT 出土稲わらブロック 大維管束 穂刈り 穂首節間

## はじめに

弥生時代の初期水田稲作における栽培管理の実態解明は、考古学や歴史学の発展ばかりでなく、社会的な関心に応えることができる。そして、現在まで続く水田稲作の高い生産性と持続性の解明に資すると考えられる。中国において3000年前までに非脱粒性を獲得したジャポニカ型栽培稲系統が野生稲から選抜され(Konishi *et al.* 2006)、日本へ導入されたと考えられている。人々は、より多くのコメを得るために、野生稲に特有な脱粒性や成熟の不均一性を無くし、種子と穂の数・サイズを大きくするなどの稲の栽培化を図りながら、その生育する場所と栽培管理の改良を続けてきたと考えられている。

当時の稲は、脱粒性程度がまだ高く、穂ごとの籾の成熟程度、籾形、穂のサイズ、草丈などの収量と生育に関係する形質が圃場間および圃場内の株内・株間で不均一であったと推定されている。このような収量・生育に関係する形質が不均一な稲群落の中から目的とする穂を選んで穂別に収穫する方法として穂刈りがあったと考えられている(木下・柳瀬 1997、古川 2007)。そして、穂の違いを識別できる穂刈りは、新しい形質を持つ系統の選抜育種と共に、選抜された形質の維持・繁殖を可能とするのである(古川 2007)。

しかし、当時の穂刈りの実態については、石庖丁や鎌といった考古学的遺物と民族例からの使用法の類推にもとづき(石毛 1968、木下・柳瀬 1997、古川 2007)、実際の

稲の考古資料から検証された事例(北條 2014)は限られる。

一方、九州から東北に分布する弥生時代の遺跡から、刈取った複数の籾や穂などが塊状となった出土米ブロックおよび刈取られた稲の茎が束状に結束された出土稲わらブロックが検出されている。これらのブロックは、当時における稲の収穫法に関する数多くの新たな知見を提供すると考えられる。しかし、その知見を得るために不可欠な、ブロック内部の構造を非破壊で調査・解析した研究は皆無に等しい。

著者らは、これらブロックのX線Computed Tomography (CT)計測をSPring-8で実施し、ブロックに内在する籾、穂および稲わらの外部・内部形態の微細構造をブロック単位で解析し、稲の収量に関連する農学的形質を評価してきた(稲村ほか 2016、三鍋ほか 2019、稲村ほか 2021)。この研究において、刈取って束ねた痕跡を示すと考えられる穂や稲わらの配置の規則性や籾サイズの均一性がブロック単位で確認された。ところが、出土米ブロックに内在する穂は先端や末端を欠損している不完全な穂であり、出土稲わらブロックに内在する稲わらには穂が着生していなかった。そのため、これらのブロックを対象として、穂刈りの実態を示すと考えられる穂ごとの脱粒性程度、籾の成熟程度および籾形の均一性、そして穂のサイズの均一性などを直接解析できなかった。

一方、著者らは穂の形態とサイズ(穂に着生している一次枝梗数や総籾数など)に深くかかわるとされている

# ジョッキ形容器の出現とその背景

橋本裕行

## 要旨

本論では、前稿（橋本 2018）をもとに新たな知見を加えて日本列島出土のジョッキ形容器について再論を試みた。遼寧省蓋州市沙溝子漢墓出土のジョッキ形陶器の存在から笠形装飾付把手を有するジョッキ形陶器の出現は、日本列島よりも遼寧地域の方が古いことを明らかにした。また、楽浪王光墓出土円形奩蓋文様と青谷上寺地遺跡出土木製脚台付壺文様との類似性を指摘することで、楽浪漆器が日本海沿岸の遺跡から出土する漆塗り木器製作に影響を及ぼしたことを想定した。そして、笠形装飾付把手を有するジョッキ形木器は、楽浪郡と日本海沿岸地域を往来する人々の直接交流のなかで創作された可能性が高いことを指摘した。

【キーワード】ジョッキ形容器 笠形装飾付把手 楽浪王光墓 円形奩蓋 青谷上寺地遺跡 木製脚台付壺

## はじめに

ジョッキ形容器は、深身の鉢形容器（土器・木器）に縦型の把手が付いた器種で、ビールジョッキに形態が類似するため「ジョッキ形土器」「ジョッキ形木器」と呼ばれる。ジョッキ形土器は、熊本県内の弥生時代後期から古墳時代前期初頭の遺跡から多く出土することが知られており、そのユニークな形態から先学によって注目され、検討が加えられてきた（梅原 1952・1969、乙益 1958、緒方 1968、島津 1990）。また、近年ジョッキ形木器の類例も知られるようになり、西日本の日本海側の遺跡を中心として出土資料が増加しつつある。

ジョッキ形容器は、日本列島以外にも中国・朝鮮半島に出土例がある。近年、中国遼寧省内の遺跡から複数の報告例があり、それらは主に前漢末から三国魏の墓から副葬品（明器）として出土する。

筆者は、日本国内および中国・朝鮮半島出土のジョッキ形容器を集成・型式分類し、日本列島におけるこの種の容器の出現が弥生時代中期中葉に遡る、つまり中国・朝鮮半島のジョッキ形容器よりも出現年代が古いこと、各型式には地域性や年代差があることを明らかにした。また、先学の指摘のように、ジョッキ形容器の把手頂部に認められる笠形装飾の祖型が中国・朝鮮半島にあることを再確認した（橋本 2018）。その後、市元壺は中国遼寧省内出土の「把手付容器」<sup>(1)</sup>について詳細な検討を行い、公孫氏政権と「把手付容器」との関係性について論じた。また、中国遼寧省遼陽地域出土の把手頂部に笠形装飾が施された「把手付容器」の模倣「原体」が、日本

列島（北陸・山陰地方）で生産され遼陽地域にもたらされた「把手付木器」であった可能性を指摘した（市元 2019）。

筆者は、前稿（橋本 2018）で熊本県内出土のジョッキ形土器について悉皆的に集成したつもりであったが、肝心の二子塚遺跡資料が脱落していた<sup>(2)</sup>。また、再度集成表を作成する過程でかなりの遺漏があることが判明した。そこで、本稿では、まず再集成結果の補足点について述べ、その後市元論文への批判を通して、ジョッキ形容器の出現とその背景について再論を試みることにする。

## 1 日本列島におけるジョッキ形容器の分布と年代

再集成の結果を表 1・2（後掲 pp.35-39）に示した。これをもとにジョッキ形容器の分布と年代についてまとめる。

### ①ジョッキ形土器の分布

東海地方は三重県、近畿地方は京都府・奈良県・大阪府・兵庫県、中国地方は岡山県・広島県・鳥取県・島根県・山口県、四国地方は香川県・徳島県・愛媛県、九州地方は福岡県・大分県・佐賀県・長崎県・熊本県・鹿児島県からの出土例がある。

### ②ジョッキ形木器の分布

北陸地方は石川県・富山県、中国地方は岡山県・鳥取県・島根県、九州地方は福岡県・大分県からの出土例がある。

### ③ジョッキ形土器の年代

中期：近畿地方は京都府 2 例・奈良県 2 例・大阪府 5 例・

# 近畿地域最古銅鐸精査考

—中川原銅鐸と松帆1号銅鐸—

森岡 秀人

## 要 旨

小論では、日本で最も古い菱環鈕式最古段階に属する隆泉寺所蔵中川原銅鐸に関する最新の実測図を提示し、長時間の観察からその諸特徴の考察を深めた。この銅鐸は国の重要文化財であり、兵庫県南あわじ市域中川原二ツ石から江戸時代に出土したものだが、最近の北部九州銅鐸起源論も関わる属性を持っている点で再び脚光を浴びている。また、2015年に突如出土した松帆1号銅鐸が同一型式であるが、鑄造の時間差は明らかである。淡路島南部は青銅器出土数では屈指の地域であるが、全国で12例しかない菱環鈕式銅鐸の関係資料にあつて、完形品によりその変遷が辿れる唯一の地域として注目されよう。松帆銅鐸は埋納についてはAMS法放射性炭素年代測定により初めて紀元前2~4世紀の数値年代が発表されている。本銅鐸の製作年代や埋納年代に関してはそれらと同じかより古いことも考えられ、出現期の銅鐸に関して、本例の属性や特徴を詳細に提示することは重要と考える。

【キーワード】隆泉寺 中川原銅鐸 菱環鈕式銅鐸 松帆1号銅鐸 銅鐸編年 鐸身 舞 鈕 型持孔

## はしがき

現在、弥生時代の銅鐸は出土地が明瞭なものが全国で534個を数え、出土の推定されている銅鐸（現存しないものや海外流出資料を含む）がおよそ610個存在する。古史料のみで個数だけ掲げるものもあり、実態の不明なものがいまなお数多く存在する。弥生時代の社会構造や農耕祭祀を知る上に今日ポピュラーな青銅器の一つとされ、これまで多くの研究者が究明の手を差しのべてきた。中でも兵庫県の淡路島は全国的に見て銅鐸を多数出土した地域としてよく知られており、とりわけ古い銅鐸が発見される地域であることでも注目されてきた。

2015年4月には松帆銅鐸が不時発見され、入れ子銅鐸など7個、銅舌7本が新たな資料として加増し、科学的調査が実施され、大いに反響を呼んだ。淡路島の銅鐸は発掘調査を経たものが皆無であるため、由緒が判明するものが多いとは言えないが、松帆銅鐸はある程度、出土場所が限定できる多数埋納の稀有な例の一つと言える。

以下に考証を深めようとする兵庫県洲本市中川原出土銅鐸は、日本列島最古段階の編年の位置を占める優品であり、20年ほど前に地元自治体（兵庫県三原郡西淡町、当時）の依頼に応じ原寸大の実測調査を行ったが、なかなか資料公表化には至らなかった。しかし、上記した松帆銅鐸の出現によって関連資料群として公にされる機会

があり、新たな研究のステージを得たものと言える（南あわじ市教委2021）。

そこで本稿では精細な実測図に基づく考証をあらためて行い、多くの知見をここに紹介する。そして、近年の初期銅鐸の研究動向を受けて、その存在意義と位置づけについて再考察を加えるものである。

## 1 銅鐸の所蔵先と由緒、過去の調査研究

### (1) 所蔵者と由緒、重文指定

この銅鐸は、兵庫県南あわじ市津井に所在する隆泉寺という寺院が所蔵している。平成の合併前は、旧三原郡西淡町にあった寺である。銅鐸は昭和30年（1955）6月22日に国の重要文化財に指定されており、現在も寺の庫裡に大切に保管されている。本寺がこの銅鐸を所有するに至った事由は後述するとして、既述したように日本列島における銅鐸の現存最古資料のグループに入ることでも著名なものの一つである。

### (2) 地誌類の記載に見える二、三のこと

淡路四草と中川原銅鐸 江戸時代後期の淡路島の地誌類にも銅鐸出土に関する貴重な記載がみられ、とりわけ地誌淡路四草はその代表的なものである。隆泉寺所蔵銅鐸については、文政11年（1825）の『淡路草』（藤井彰民著）と安政4年（1857）の『味地草』（小西友直・錦江著）

# 銅鐸の鑄掛けについての一考察

北井利幸

## 要旨

本稿では、銅鐸の補修技術の一つである鑄掛けの方法について外縁付鈕式銅鐸である四区袈裟襷文銅鐸の中村銅鐸と横型流水文銅鐸の川島銅鐸に施された鑄掛けの観察結果をもとに検討した。中村銅鐸の内面突帯に施された鑄掛けは中型を加工し、裾端部から鎔銅を流したものであった。川島銅鐸の鑄掛けには鎔銅が冷え固まる過程で生じるヒケを確認したほか、鑄掛け部内面の形状から鎔銅を外側から流したとしか考えられないことを指摘した。以上から鑄掛けを内面からおこなうとする説に対して異論を提起し、鑄掛けの方法について再考を試みた。

【キーワード】銅鐸 鑄掛け 鑄造欠陥 ヒケ 補修技術 中村銅鐸 川島銅鐸 外縁鈕式銅鐸

## はじめに

鑄造品である銅鐸には鑄込み時に様々な欠陥が生じる。鎔銅が冷え固まる過程で生じる“ヒケ”や湯流れ不良により生じる鬆、ピンホールなどがその代表的なものである。こうした鑄造欠陥の多くはそのままの状態でも流通、使用されるが、鎔銅を流して“鑄掛け”をおこなうものがある。この鑄掛けをおこなった後に袈裟襷文や流水文などの文様を金属製工具で彫り込む“補刻”をおこなうものもある。これらの補修技術は個々の銅鐸の検討の中で論じられることが多く、体系的に論じた研究は少ない。銅鐸の製作工程のどの場面で鑄掛け、補刻などの補修がおこなわれたのかを検討課題となっている。

補修技術の一つである鑄掛けは難波洋三によると外縁付鈕1式以降の銅鐸に確認されるという(難波ほか2015)。確かに菱環鈕1式の荒神谷遺跡5号銅鐸、菱環鈕2式の松帆1号銅鐸、中川原銅鐸を観察する限り鑄造欠陥を確認できるが鑄掛けは確認できなかった<sup>(1)</sup>。鑄造欠陥を補修する必要がなかった、あるいは技術自体なかったと捉えられる。このほか難波は鑄型の転用という観点から分類をおこなっている(難波ほか2015)。近年積極的に研究を進めている菊池が鑄掛けを含む補修技術を銅鐸の時間的変遷の中で位置づけたことは重要な指摘である(菊池・若林2017、菊池2018)。また菊池は、補修技術を3つに分類し、鐸身部の鑄掛けを内面からおこなったと想定している(図1、菊池2018)。鑄掛けを内・外面どちらからおこなったかは意見の分かれるところである。

本稿では、鑄掛けがおこなわれるようになる外縁付鈕式段階の銅鐸に注目し、なかでも特徴的な鑄掛けがおこなわれた外縁付鈕1式の中村銅鐸と外縁付鈕2式の川島銅鐸を例に、その方法と銅鐸製作工程のどの段階におこなわれたのかについて検討する。あわせて鎔銅を内面から流して鑄掛けをおこなったという先行研究に対して、2点の銅鐸から私見を述べる。

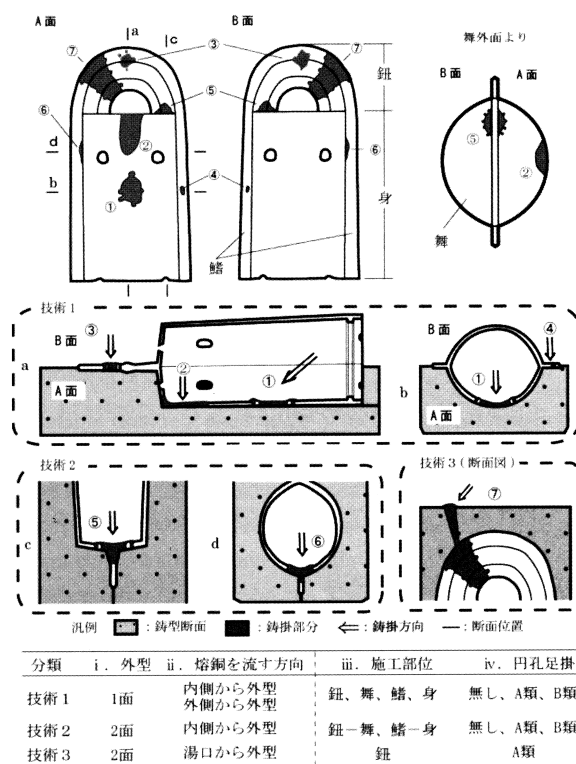


図1 補修技術の分類(菊池2018より引用)

# もちほばれた河内の壺

—弥生時代後期における生駒山西麓産広口壺の動態—

西浦 熙

## 要 旨

本稿は、広範に搬出される弥生時代後期の生駒山西麓産広口壺について、編年作業を行い、その搬出動態を検討したものである。時期別様相の検討については、口縁部の施文と頸部形状に着目し、各要素を数値化した。その結果、後期前葉には無文に直立頸部の壺が多く、その後施文が進むとともに頸部は外反、外傾していき、後期中葉にかけては凹線竹管円形浮文が増加することを示した。

それをもとに他地域出土西麓産広口壺の搬出動態を分析し、後期中葉に搬出拡大の画期があることを指摘した。その背景には、当該期の広域な地域間交易網にアクセスするため、中河内地域が積極的に大形広口壺を各地へ搬出した可能性を考えた。

【キーワード】生駒山西麓産土器 大形壺 中河内地域 弥生時代後期 地域間交流

## はじめに

生駒山西麓（以下西麓と呼称）産土器は、特徴的な胎土と含有鉱物から識別が容易であり、古くから土器の移動現象を論じるうえで俎上にのせることが多かった。本論でも、近年改めて注目される、弥生時代後期における西麓産広口壺の広範な搬出現象に着目する。弥生時代後期の西麓産広口壺については、分布域である「静」的側面については理解が進みつつある一方で、搬出動態、すなわち「動」的側面については研究の蓄積が少ないのが現状である。そのため、まずは搬出元である中河内地域において広口壺の変遷を捉え、それをもとに他地域への搬出動態を明らかにし、さらには中河内地域と他地域との交流関係について検討をくわえていきたい。

## 1 弥生時代後期の西麓産広口壺研究略史

弥生時代後期の西麓産土器のうち、特に本論で対象とする垂下口縁をもつ広口壺について言及されたものを以下では取り上げる。

搬出にかんする研究 西麓産土器の搬出は学史上ではやくから認識されてきた。弥生時代後期の資料についても、下村晴文・福永信雄による1980年の集成図では、但馬まで搬出されていることにすでに触れられているが、当時は庄内式土器とともに、中期から発展的に搬出が広域化するという文脈で語られた（下村・福永1980）。

弥生時代後期の西麓産土器搬出の特殊性をはじめて見

出したのは、秋山浩三である。秋山は、京都府に運ばれた西麓産土器を集成する中で、後期については、丹後のような遠隔地でも出土し、特に墓域での出土も目立つことから、丹後と西麓地域間の「直接的かつ特殊な事情」、「首長層間の深い接触関係」を考えた（秋山1989）。

また兵庫県域に運ばれた西麓産土器を集成した荒木幸治は、弥生時代後期のV期前半には産地を無視して搬入されること、高地性集落に集中することなどから、中期から大きな変化があったことは指摘しつつも、庄内式期にみられる搬出域、出土遺跡の大きな変化に重点を置いた（荒木2009）。杉本厚典は中河内地域内での移動現象に触れ、儀礼的なセットとして西麓地域から平野部へ土器が搬出されていた中期に対して、後期は平野部において不足する大形品を補うかたちで大形壺のみが搬出されたと考え、あくまで中期から後期への搬出の変化については、実利的側面への変化を考えた（杉本2001）。

近年、弥生時代後期の西麓産広口壺の広範な搬出に着目した桐井理揮は、後期の遠隔地出土西麓産土器を集成し、後期には日常の交流圏を越えた「域外」に大形品が搬出されることを指摘した（桐井2019）。搬出の時代的傾向についても触れ、後期初頭から前葉に東部瀬戸内に分布が集中し、後期中葉にはそれと入れ替わるように日本海域に分布が増えると整理した。上記の傾向から桐井は、搬出の背景には鉄製品の入手をめぐる広域ネットワークの形成も関連する可能性を挙げ、単なる実利的意図を越えて西麓産広口壺が搬出されたと考えた。また搬出された壺の仔細な特徴にも触れ、施文は西麓地域では

# 土器に描かれた組帯文

—伴堂東遺跡出土資料を中心として—

杉山 拓己

## 要 旨

奈良盆地東南部における初期大型古墳群の成立について評価するためには、その前段階からの地域社会の様相を検討する必要がある。今回はそのための基礎資料のひとつとして、当該期の装飾文様である組帯文系文様のうち、土器に線刻文様として描かれた資料について検討した。

まず、三宅町伴堂東遺跡で出土した特異な事例を紹介した。そして奈良盆地における出土例の集成をもとに、その様相についての基本的情報を提示した。

奈良盆地においては東南部を中心に複数の遺跡で組帯文系文様が存在し、その種類もループ表現主体のもの、屈曲表現主体のもの、バチ形図形主体のもの、鍵手文などの各種のものが存在することが確認できた。このことは当地域も組帯文系文様を主体的に用いた地域のひとつであることを示すと考えられる。

【キーワード】 弥生・古墳時代 土器 組帯文

## はじめに

初期大型古墳群成立・展開の地と評価される奈良盆地東南部においては、その前段階を中心に盛行する桜井市纏向遺跡・天理市柳本遺跡群の存在が古くから注目されている。しかし、これらの遺跡やそれを含む地域社会の展開についての実態やその評価については検討すべき課題も未だ多く残されている。

こうした問題意識のもと、本稿では当該期の地域間交流を示す資料のうち、器物を飾る文様として用いられた組帯文<sup>(1)</sup>系の文様について、奈良盆地出土資料の様相を示すことを目的とする。

組帯文系文様は、石製品や木製品において浮彫表現として表現されたもの、特殊器台の文様を構成するもの、土器に線刻文様として表現されたものなどがある。この中で土器の線刻文様については、奈良盆地出土資料を集成してその様相をまとめるという基礎的な作業についても、これまでにはおこなわれていない。

こうした状況をふまえ、筆者はこれまでに既出資料についての検討結果を資料紹介という形でおこなってきた(杉山 2020・2021)。

今回は、三宅町伴堂東遺跡で出土した特徴的な事例を中心として取り上げ、奈良盆地の土器にみられる組帯文系文様について、筆者による集成作業と資料調査の結果を示したい。また、それをもとに当地域における様相について若干の検討をおこないたい。

## 1 伴堂東遺跡出土例について

伴堂東遺跡の組帯文系文様をもつ土器(図1)は、土坑 SK2480 から出土した(坂 2002)。

この遺構の平面形は不整形な楕円形で、長径 4.5m・短径 3.3m、検出面からの深さが 1.5m である。埋土の上・中層からは一括して廃棄されたと考えられる土器が多量に出土し、その総量はコンテナ 40 箱分におよぶ。この量は、この調査におけるひとつの遺構からの土器の出土量としては最も多い。

また、同遺構から出土した土器には、他地域の土器がまとまって認められることも特筆される。これらの土器の中には台付甕形土器等の三河地方に起源をもつと考えられるものが多く含まれるほか、線刻をもつ大型の壺形土器などもある。報告書における考察では外来系土器が約 30% であり、そのうち 72% が東海地方のものであることが示されている。

この遺構の土器群の時期は、報告書で示された編年において、庄内式併行期とされる「伴堂 I 式」を 3 つに細分した中の「伴堂 I -2 式」に位置づけられている。

ここで取り上げる資料は、報告書の図 176-158 の鉢形土器である。報告書においては「弧帯文」の線刻とされるのみで、詳細の検討はおこなわれていない。ここでその詳細について述べておきたい。

この土器の器形は、畿内地方に通有の鉢形土器である。口縁部径 12.4cm、底部径 3.6cm で、器高は 5.9cm である。

# 3D データ解析による泉屋博古館所蔵の建安廿二年（217年） 重列神獸鏡の同形2面の検討

—同異形状・鏡面のフィット球・湯口方向・鑄造方法について—

三船温尚・廣川 守

## 要 旨

これまで同型鏡と判断されていた後漢末期に製作された泉屋博古館蔵の重列神獸鏡2面の全形を3D計測し、6種類のポリゴンデータ解析で両鏡の比較検証をおこなった。両鏡は紋様形状が合致し、一部のガスの窪みや紋様の不明瞭箇所、鑄バリ、范傷の位置とその形状などが完全に一致することがわかった。新たな試みとして、鏡面にフィットする仮想球の検査をおこない、ほぼ正球の鏡面であることとその球の直径が両鏡でほぼ同じあることが判明した。さらに、両鏡面には注湯加熱による鑄引けが原因の仮想球面から顕著に窪んだ箇所が確認でき、窪みの位置が一致したことから、両鏡の堰位置が同位置にあったと判定できた。本研究は3Dデータを用いて、同形の鏡の形状の同異比較や、鏡面の仮想球による調査を初めておこなったものであるが、鏡の全形の3Dデータ解析は、今後の新たな成果や方向性の可能性を有することがわかった。

【キーワード】3D計測 ポリゴンデータ解析 抜け勾配 等高線 厚み分布 重ね図 鏡面の仮想球

## はじめに

高精細デジタル三次元計測によって獲得したポリゴンデータの解析は、対象資料の形態研究において、肉眼での計測調査では実現できない厳密な数値の三次元的取得、そしてその数値の明確なビジュアル化を可能にした。青銅鏡においても鏡背紋様の詳細な三次元的形状比較、鏡全体にわたる厚みの把握、鏡面の曲面状況の把握などに極めて有効である。

そのため筆者らは2015年から継続して泉屋博古館所蔵210面強の青銅鏡について悉皆的な計測を実施している。これまでに203面の計測を実施したが、そのなかには同型鏡と判断されているものがいくつか存在している。本稿では、肉眼観察とメジャーによる計測によって同型鏡と判断されたもののうち、後漢末期に製作された重列神獸鏡2面について実施した解析結果を紹介する。

なお、本稿では、同一鏡体で同寸法、同紋様を有する複数の鏡について、同じ原型を用いて鑄造したと考えられるものを同型鏡、同じ鑄型を使用して鑄造したと考えられるものを同范鏡、鑄造完成品を原型として鑄型を製作し鑄造したと考えられるものを踏返鏡と称する。

## 1 本稿で採り上げる資料

本稿で対象とするのは、建安22年（217）の紀年銘を有する重列神獸鏡2面（収蔵品番号M143、M144、以下

M143鏡、M144鏡と記述する）である（面径11.8~11.9cm、重量M143:250g、M144:230g）。鏡背外縁に62文字の銘帯がめぐり、後漢建安22年10月に師鄭豫が製作したことが記されている。銘帯内側に界圏帯がめぐり、その内側に内区主紋様が五段の重列構成であらわされる。界圏帯に沿って朱鳥（上方）、玄武（下方）、青龍（右側）、白虎（左側）を配し、そのなかで最上段に神仙像（両脇に朱鳥を従える）、第二段には中央の不明像をはさんだ左右に二体の神仙像（うち一体は鳥に乗る）、第三段は大柄の扁平鈕をはさんで傘をかぶった正面向きの神仙像二体、第四段は中央神仙像の左右に巨を銜えた二体一対の獣をそれぞれ配置する（最下段は玄武のみ）。なお、この2面の鏡は1920年代に浙江省紹興で出土したとされている（梅原1970）。

M143鏡（図1）は、鏡背面全体が黒色の錆で覆われ、紋様の窪んだ部分のところどころに褐色の付着物が詰まっている。さらに中央の大柄な扁平鈕から下方の紋様にかけてざらついた緑色の錆がかかる。とくに鈕下の神仙像は錆の浸食でへこみが生じている。その他は錆膨れなどによる際立った凹凸は確認できない。紋様は後述のM144鏡よりもクリアで、おおよそ輪郭もシャープに鑄出されているが、最上段の神仙像及びその右側の朱鳥を中心に輪郭が崩れ気味で不明瞭になっている。銘帯も最上段神仙像の外側の四文字くらいが鑄造不良で判別できない。

鏡面は、一部で白銀色の地金が確認できるが、全体の

# 纏向遺跡における鍛冶関連遺物の基礎的研究

水野 敏 典

## 要 旨

古墳時代の刀剣類の出土量は弥生時代と比べて爆発的に増加する。しかし、長大な刀剣類の国内生産開始は古墳時代前期後半以降とみられ、それまでは大陸からの輸入に頼ると解釈されている。ところが、環頭部をもたない直刀は倭独自の型式であり、大陸製の素環頭大刀の環頭部を切断しても必ずしも直刀と同形態にならない。前期前半の全ての直刀を素環頭大刀から改変したとみるには数も多く、検討の余地があると考えられる。

古墳時代前期最大級の鍛冶遺跡である博多遺跡群から鉄鏃の未成品は出土するが、刀剣類は出土せず、刀剣生産の可否は不明であった。その中で博多 50 次の全長 50cm 以上の大型砥石の確認を契機として、大型利器の研磨に用途を限定できる大型砥石の存在に注目し、刀剣類の国内生産開始年代の検証を進めてきた。

本稿では、奈良県纏向遺跡の鍛冶関連遺物とともに砥石と木製刀剣装具の出土状況を確認し、新資料として勝山池内の纏向 111 次の砥石を加えて検討を行い、刀剣類製作の可能性を検討した。

【キーワード】 大型砥石 鍛冶関連遺物 刀剣 生産開始年代

## はじめに

鉄製刀剣類の出土量は、古墳時代に入り飛躍的に増大するが、その生産と供給については不明な点が多い。現状では長大な刀剣類を大陸製として、国内生産の開始時期を古墳時代前期後半以降とする解釈が有力である。長大な刀剣類の国内生産は、地域の軍事力の向上に直結し、地域間の関係に重大な影響を及ぼすと考える。

国内生産の開始時期について池淵俊一は 4 世紀後半から 5 世紀初めとし（池淵 1993）、豊島直博は前期後半の短刀の出現に始まり、中期初めに大刀（直刀）と長剣が製作されたと推測する（豊島 2010）。村上恭通は鍛冶遺構の分析から前期中葉に直刀や長剣の画一的な生産が開始されたとし（村上 1999）、真鍋成史は前期後葉の畿内での刀と長剣製作の可能性を考えるが、その生産量は全国古墳副葬品を補うものではないとした（真鍋 2017）。

それに対して菊地芳朗の古墳時代の当初より直刀生産を開始するとの指摘もあり（菊地 2010）、国内生産開始を判断する基準の議論は十分でなかったと考える。

一方、古墳時代前期最大級の鍛冶遺跡である福岡県博多遺跡群からは鉄鏃等の小型鉄器の未成品は出土するものの刀剣は出土せず、刀剣類生産を判断する決め手に欠けていた。しかし、博多 50 次において全長 50cm を超える大型砥石が確認され（図 2-1）、福岡市埋蔵文化財セ

ンターでの鍛冶関連遺物の研究会を契機として（愛媛大学ほか 2018）、刀剣類の国産について再検討の必要性を感じ（水野 2018）、大型砥石を含めた博多遺跡群を検討し、刀剣生産開始年代が遡る可能性を考えた（水野 2021）。

今回は、博多遺跡群と近似するカマボコ形韃羽口が出土する奈良県纏向遺跡の鍛冶関連遺物を、刀剣類の研磨に特化するような全長 30cm を超える大型砥石に注目して整理した。新資料として纏向 111 次（以下、次数は纏向遺跡調査次数を指す）の砥石を取り上げ、刀剣類生産の可能性を検討する。

## 1 纏向遺跡と鍛冶関連遺物の研究史

奈良県桜井市に位置し、奈良盆地東南部の三輪山西側、纏向川北岸に接する南北約 2km、東西 2.5km の遺跡である。最古級の前方後円墳である箸墓古墳、ホケノ山古墳が含まれ、古墳時代前期前半のヤマト王権中枢の所在地と目される。ヤマト王権を支えた人々の墓所とみられるオオヤマト古墳群の副葬品は、この遺跡内で保管、管理された可能性が極めて高い。

纏向遺跡の鍛冶関連遺物は、これまで桜井市埋蔵文化財センターによる企画展「纏向遺跡 100 回調査記念」（桜井市埋文 1998）、「ヤマト王権はいかにして始まったか」（桜井市埋文 2007）をはじめ、石野博信編『大和纏向遺跡増



# 畿内の古墳の石室材と石棺材

奥田 尚

## 要 旨

畿内の3・4・5世紀の竪穴式石室では石室材に意図した石材、6世紀頃に始まる横穴式石室には造営地付近の石材が使用されている。竪穴式石室は石材の使用方法から被葬者を大・中・小の豪族に区分され、供献材の使用位置が被葬者の身分によって異なる。大豪族の天井石は一部が供献材か、供献材のみである。4世紀後半頃に天井石が播磨の石製のみと一元化される。また、この時期に中豪族の石室に讃岐の石製の石棺が使用される。5世紀になると大豪族の古墳の天井石と石棺に播磨の石のみが使用される。6世紀頃になると石室内に肥後の石製の大・中・小の家形石棺が使用され、これに呼応してか奈良盆地西南部では鹿谷寺跡北付近の石製の家形石棺が使用される。以上のような石室材・石棺材の使用現象は当時の豪族間の社会的関係を石材が示しているといえる。

【キーワード】大豪族 中豪族 小豪族 竪穴 横穴 石室材 天井石 壁石 大和 讃岐 播磨 肥後

## はじめに

畿内の大和川・淀川流域、泉北地方には大・中・小の古墳が多く分布する。これらの古墳は古墳時代に造られた豪族の墓で、残存しているものである。残存良好な大きな古墳の多くは陵墓や陵墓参考地となっている。

昭和も後半となると宅地開発や道路建設に伴い埋没していた古墳が多く発見されているが、その多くは発掘後に消滅している。ここで述べる茨木將軍山古墳も宅地開発に伴い、石室のみが移築された古墳である。石室の天井石は発掘当時の写真をもとにすれば復元される。

古墳の研究についてみれば、墳形や出土品についての研究は非常に多いが、多量に使用されている石材についての研究は皆無に等しい。石棺についてはごく僅かの報告があるが、石棺の形態についての研究が殆どを占める。しかし、古墳に使用されている石室材や石棺材の供給は、当時の豪族が社会の中で生きていた証である。

古墳時代は前・中・後・終末の4期に区分され、終末期と飛鳥時代がほぼ同時期である。古墳に石室が出現する3世紀後半頃から家形石棺の使用が始まる6世紀前半頃までの期間に使用されている石室材・石棺材を肉眼・肉眼で観察した。その石材の石種と採石推定地、石材の使用傾向について述べ、当時の石材使用の様子から豪族間の結びつきについても言及する。

## 1 竪穴式石室の壁石に基づく古墳の地域性

石室には竪穴式石室と横穴式石室がある。3・4・5世紀の竪穴式石室では大豪族にまとまる豪族集団ごとで特別な石が使用される。竪穴式石室の区分、壁石と天井石の石種とその使用について述べる。

### (1) 石材の使用方法に基づく竪穴式石室の区分

竪穴式石室材の使用方法和使用されている石種の位置には一定の使用基準があったようである。

石室材の積み方には石材の長軸方向を横にして積む重ね積の方法と石材の長軸を縦方向に使う方法がある。

壁石の石種を基に使用位置を比較すれば、壁石と異なる石種の石材が天井石に使用されている場合、壁石と同じ石種の石材が天井石に使用されている場合がある。後者の場合、壁石に異なる石種の石材が使用されている場合がある。

石材の使用方法和使用されている石種をもとに石室を区分すれば、

- I：壁石材が重ね積で、壁石と異なる石種の石材が天井石に使用されている石室
- II：壁石材が重ね積で、天井石が壁石と同種の石材である石室
- III：壁石の長軸を縦方向に使用され、天井石が壁石と同種の石材である石室<sup>(1)</sup>

となる。これらの区分と石室の大きさを比較すれば、

# 古代の信仰と神社の成立

米川 仁一

## 要 旨

神社の存在は、平安時代に成立した社殿を伴う構造物以外には確認されていない。しかし、古くから信仰された自然神崇拝から発展して、神殿に神を招き入れておこなう祭祀は、もっと古い時代から存在した可能性が高い。その可能性を秘めた遺構は、古墳時代の方形区画施設やその内部の建築物などが有力視されている。古墳時代前期頃から出現する方形区画施設には、区画内部に祭祀的施設を伴うものが多くみられる。構造的には、圓形埴輪と家形埴輪や井戸形埴輪をセットにした「導水施設形埴輪」と類似した遺構であり、現在に継承されている神社建築とも類似点が多くみられる。そうした観点から、全国的に確認されている祭祀施設を伴う古墳時代前期4世紀の方形区画施設の構造を再吟味し、神社の成立について考えてみたい。

【キーワード】神社建築 方形区画施設 国生本屋敷遺跡 四斗蒔遺跡 中溝・深町遺跡 石川条里遺跡 大衡遺跡 森山遺跡 菅原東遺跡 纏向遺跡 秋津遺跡 尺土遺跡 長瀬高浜遺跡 小迫辻原遺跡 伊勢神宮 出雲大社

## はじめに

古来日本人は、自然の山や海・湖・木・山・岩・火・水などに神が宿ると信じ、それらを信仰の対象としてきた。古代神道では、社を建ててその中に招いた神を祀るのではなく、「まつり」の時にだけ神籬ひもみぎに神を招いて祭事を取りおこなった。古代神道においては、古来「八百万の神」の存在が信じられてきたように、人間の周辺には様々な神が存在し、それらを崇敬することが信仰の基本となっている。そうした信仰の流れの中で、いつ神社が成立していったのかについては、未だはっきりとした見解が出されていない。

ここではこれまでに確認された祭祀遺跡の痕跡から、神社の成立に関わると考えられる遺構を中心に、神社の成立について考えてみたい。

## 1 日本古来の信仰

### (1) 様々な信仰形態

自然神崇拝 古代日本の信仰の中で、最も古く基本となったのが自然神崇拝である。火や水・樹木・岩などに宿る神への信仰であり、磐座祭祀や水辺でおこなわれた祭祀遺跡等がそれらの痕跡といえよう。また、海や山・峠などの地形を対象とした信仰には、神奈備信仰（祭祀）や海神信仰（祭祀）などがあり、現在こうした場所には

神社が建立されている場合が多い。

神への祈り 自然神崇拝の他には、祖先や血縁への信仰としての墳墓祭祀や、火を焚き祭器具類を奉納（廃棄）して日々の平穏な生活への感謝に対する日常祭祀などがおこなわれていた。こうした祭祀は、仏教などの他の宗教とは異なり、偶像を崇拝するものではなく、身の回りに存在するとされた神々に対する崇拝であったと考えられる。

護身の祈りや五穀豊穡の祈り さらに災害や怪我・病気などから身を守るための祈り、狩猟採集や農耕による収穫への願いや感謝に対する祭祀など、人々の生存を守るための祈りを神に捧げる信仰も忘れてはならない。こうした様々な信仰（祭祀）形態があったと考えられるが、これらの痕跡として今日発掘調査等で確認されている祭祀遺跡・遺構も多種多様であり、その全てを系統的に把握できているとは言い難い。

### (2) 祭祀遺跡とは

祭祀の痕跡 原始・古代の祭祀遺跡・遺構とは、神が降臨する場所において人々が祈りを捧げた痕跡のことであるが、祈りの際に対象とされた岩や木などの対象物の他には、奉納された祭器具・供物や火を炊いた痕跡などからだけしか確認が困難なのである。特に、神籬など仮設の祭壇などを設けた祭祀の場合、石や土などで基壇を構築する事例以外では、なかなかその痕跡を確認するこ

# 鏡作神社所蔵三角縁神獸鏡の製作技術に関する覚書

宇野隆志・清水克朗・清水康二

## 要 旨

鏡作神社所蔵三角縁神獸鏡の実見を機に、同範関係にある東之宮古墳出土鏡との比較検討をおこなった。その結果、両鏡の界圏外斜面文様帯と鈕形状が大きく異なることが明らかになった。

鏡作神社鏡の形状に関しては、界圏より外側の破損あるいは切断の後に、界圏外斜面全体が研磨され、鏡縁に改変された可能性を示した。

一方、三角縁神獸鏡が同範技法と鏡範再利用技法の併用によって製作されるという近年の研究成果に基づいて、両鏡の差異が鋳型面の部分的な改変に伴うものと仮定すれば、両鏡が鏡作神社鏡→東之宮鏡の順序で同範技法によって製作された可能性を指摘した。

【キーワード】3次元計測 鏡作神社 三角縁神獸鏡 鏡範再利用技法 同範技法 同型技法

## はじめに

三角縁神獸鏡は古墳出土鏡のなかでも、多くの鋳造欠陥を残し、かつ同範鏡を多く有するという特質を持つ鏡式であるために、古代鋳造技術の復元に関する研究対象にされてきた。その一方で、三角縁神獸鏡は古墳時代前期を中心とする古墳副葬器物であり、大型古墳に多量に副葬されること、列島各地の有力墳間で同範鏡を分有することなどから、当該期の政治史研究に大いに寄与してきた考古資料でもある。

さて、奈良県磯城郡田原本町八尾に鎮座する鏡作坐天照御魂神社（以下、「鏡作神社」と表記）には、御神宝として三角縁神獸鏡1面が所蔵されている（以下、「鏡作神社鏡」と表記）。この鏡はかつて、小林行雄の同範鏡論（小林1955）に対する批判として、三角縁神獸鏡の製作技術に関する論点で取り上げられたこともある重要資料である（森1962）。

本稿では、本資料を実見する機会を得たことを受けて、近年、三角縁神獸鏡を中心とする鏡群でその実態が明らかになりつつある鏡範再利用技法に関わる研究の中でその位置づけを試みる。

## 検 討

### (1) 資料（図1）

概 要 資料の詳しい来歴は今に伝わっていないが、和田萃は神社近傍の古墳から出土したと想定する（和田

1995, p.50）。

本資料は、大正時代よりすでに各論考で取り上げられており、富岡謙蔵は鏡作神社鏡について、「銘帯より以外を切断せるは、支那製作を証する銘文ありては都合のあしき事ありし故なるべし」とし、鏡の製作地とその残存状況を関連づけて言及している（富岡1916, p.121）。さらに、後藤守一によって、内区主文様の共通性からへボソ古墳出土鏡（88鏡）<sup>(1)</sup>と同一型式であることが指摘されている（後藤1920・1926）。

資料は三角縁唐草文帯三神二獸鏡の内区を中心とする鏡片で、京大目録89鏡である。鈕から有節重弧文座、内区主文様帯、内斜面に鋸歯文をもつ界圏と続き、内区外周および外区は欠いている。内区は4つの振座乳（右回り）で区画され、三神二獸が配置される（配置I'・表現④）。

神像は鈕をはさんで対向配置される、東王父と並座する二神である。東王父は怒り肩で、袖の裾が巻き上がり、両脇には小禽を外向きに配する。二神並座像は振座小乳をはさんで対峙し、乳との間には山岳文を重ねた表現で埋められる。獸像はいずれも横向きの頭部で二重顎表現をもち、一方は巨を銜む。獸像の前方には、振座小乳を基とする傘松文と旗、仙人がそれぞれ配される。

鈕孔方向はおおむね0時～6時方向である。湯口方向については推定する根拠がない。鈕はブロンズ病に伴う表面の剥落が著しいが、残存部分からは研磨が施されたことが確認できる。

なお、89鏡は、既存の三角縁神獸鏡編年においては、「舶載」三角縁神獸鏡の各段階のうち、澤田V段階（I

# 雨の宮1号墳出土の腕輪形石製品

高橋 幸治

## 要 旨

石川県中能登町所在、雨の宮1号墳出土腕輪形石製品の車輪石および石釧を検討した結果、形態的近似性が意識された配置を持つ組合せが、19点中17点に認められ、副葬配置と形態的特徴の関連性が如実に表れていると捉えた。このような組合せは、車輪石の祖形とされる京都府芝ヶ原古墳出土の銅釧にもみられ、埋葬側の選択的な意図が働いており、現象として古墳成立当初から存在していた可能性がある。車輪石では、外形・内孔形が卵形、斜面に凹帯もしくは折面帯の装飾を持ち、山・谷部に32本の刻線で肋条表現を行っている車輪石と祖型の可能性が指摘される福井県龍ヶ岡古墳貝輪が、形態的に親縁性が高いと考えた。この一群を、規格性が高い車輪石の一群と捉え、最古段階の車輪石にはみられないことから、古墳時代前期後半に需要と供給が増加するに伴い生産された個体群のうち的一端を担った可能性が高いとした。

【キーワード】 雨の宮1号墳 腕輪形石製品 形態と配置 二個体一組の原理 祖型・形 32条の肋条

## はじめに

雨の宮1号墳は、石川県鹿島郡中能登町（旧鹿島郡鹿西町）に所在する国指定史跡の前方後方墳である。1992年、史跡整備に伴う範囲確認調査が開始され、5カ年にわたる調査が行われた。調査内容と古墳築造の歴史的意義については、順次、整備報告書、シンポジウム資料などで報告されている（鹿西町教委1978・1998、鹿西町古墳シンポジウム実行委員会1998）。調査では、1・2・5・6・7・17・35・37号墳を発掘し、墳形、墳丘規模、外表施設、埋葬施設、副葬品など、可能な限りにおいて、その内容を確認、報告した（鹿西町教委2005）。ここでは本稿でとりあげる腕輪形石製品が出土した1号墳について概要を記しておく。

1号墳は、葺石を施す前方後方墳である。全長64m、後方部長41.4m、後方部西辺幅36m、後方部東辺幅43.6m、後方部北辺幅41.4m、後方部高8.5m、前方部長22.6m、前方部前端幅31m、後方部高6.5mの墳丘規模をもつ。丘陵頂部を削り出して墳丘を築造していることに起因するためか、葺石が葺かれた外側には、基台として削り残されている土身の部分が存在している。外表施設としての埴輪はもたないが、葺石は墳丘のほぼ全面に施されていた。施行した際の工程や単位と思われる、いわゆる区画石列が確認されている。後方部西の裾部からは、壺・甕・高杯・小型壺などの土師器が出土しており、布留3式あるいは4式古段階併行の年代観が与えられた。

（谷内尾2005）。後方部頂においては、粘土槨及び木棺を直葬した埋葬施設が確認され、墓壙の切り合い関係から、相対的に粘土槨が古く、木棺直葬が新しいことがわかっている。基本的に1号墳は、粘土槨に埋葬された人物のために築かれた古墳であろう。墳頂付近には、大きな盗掘坑があったが、幸い副葬品にまで到達していなかった。粘土槨は棺床粘土と被覆粘土からなり、被覆粘土上部には、径の小さな丸太状もので叩きしめられた痕跡が認められ、棺床粘土および被覆粘土内部には、刳抜式割竹形木棺の痕跡を良くとどめている。副葬品は、倭製神獸鏡1、腕輪形石製品19、琴柱形石製品1、管玉14、方形板革綴短甲1、漆塗盾1、刀5、劍16、銅鏃55、鉄鏃約74、鉄斧2、鍬・鋤1、鋸1、鎌1、ヤリガンナ2、鑿、針状品、不明漆製品である（鹿西町教委2005）。

雨の宮1号墳から出土した腕輪形石製品の内訳は、19点のうち車輪石が4点、石釧は15点で、鍬形石は出土していない。畿内以東の日本海域はおろか、汎日本列島的に見渡してみても、数の多さは秀でている（鹿西町教委2005、中屋2021）。墳丘規模こそ70mに満たないが、明らかにされた埋葬施設の重要性や副葬品の豊富さから、被葬者に対する評価と資料的価値は高く、以後の古墳時代研究に大きく貢献しているといえる（大塚2005、岡林2018、橋本1998・2005、中屋1998、福永2000、鹿西町教委2005、鹿西町古墳シンポジウム実行委員会1998）。また近年、腕輪形石製品の個別研究も増加しつつあり、多様な視点が提示され、研究も細分化が進行中である（石

# 近畿地方の盾持ち人埴輪の性格

岡崎 晋明

## 要 旨

盾持ち人埴輪の研究は、関東地方において早くから進められてきた。最古の盾持ち人埴輪が奈良県茅原大墓古墳から出土し、古市古墳群の墓山古墳や野中・宮山古墳からも出現期に出ていることから、盾持ち人埴輪による喪葬儀礼がヤマト王権で行われていたと想定した。そこで近畿地方の盾持ち人埴輪が出土している古墳の墳形、規模、位置を検討することから始めた。また盾持ち人埴輪の頭部や顔面の造形や製作技法は時間的に変化するものの、基本的に変わっていないことが分かった。一方、盾持ち人埴輪は古墳だけでなく導水施設の儀礼跡からも出ており、「死」と「生」の異なる世界に用いられていたことの意味を考えると、盾持ち人埴輪の性格は『周礼』『後漢書』による「方相氏」の儀礼の日本への伝播と想定する。

【キーワード】 盾持ち人埴輪 近畿地方 死と生の世界 盾と戈をもつ人物絵画 方相氏

## はじめに

桜井市茅原大墓古墳から4世紀末葉という最古の盾持ち人埴輪が検出されて以降、人物埴輪の出現問題を始め、新しい研究面の進展、従来からの問題点の深化が見られるようになった。一方、近畿地方の各地からは徐々に盾持ち人埴輪の増える傾向にある。

盾持ち人埴輪は近畿地方それも中期の大和において出現し、それ以降さほど時間を経ることなく九州や関東へと拡散したと考えられる。そこで、近畿地方の盾持ち人埴輪のもつ基本的な特徴、すなわち出土した古墳の墳形・規模・位置や盾持ち人埴輪の頭部・顔面の表情などの造形的特徴を整理することにした。一方導水施設からの出土例もあり、儀礼における盾持ち人埴輪の性格について探りたいと考える。小生は2013年に「盾持ち埴輪の諸相」という論文を纏めたことがあるが（岡崎2013a）、今回は視点を変えて考察するものである。

## 1 近畿地方の盾持ち人埴輪の出土例

### (1) 奈良県

①桜井市茅原大墓古墳から盾持ち人埴輪1点が出ている。古墳の規模は全長約86m。前方部が短い帆立て貝式の前部後円墳で、前方部前面の周濠は底面で約10mの幅を有している。墳丘の西側は後円部に沿って「小池」と呼ばれる池もあって周溝形態を反映させている。

埋葬施設は後円部から確認していないが、前方部の墳

丘斜面などから円筒埴輪棺3点を検出している。盾持ち人埴輪は東側くびれ部にある前方部1段目の基底石の外側から出ている。円筒埴輪の基底部が単独で立っていて、その周辺に盾持ち人埴輪の破片が散乱していた。埴輪に黒班があった。

盾持ち人埴輪を復元すると全高は約120mになる。頭部と円筒埴輪は一体化技法で製作されていた。頭部は衝角付冑を装着していた。顔面は目・口を削り抜き、鼻部分に粘土の剥離痕があった。顎には粘土を足して顔面装飾を施し、顔面全体に赤色顔料を塗布していた。盾は粘土板を長方形に造り円筒埴輪と接合し、盾面の文様は外区に鋸歯文、内区に格子文を施していた。

古墳の築造時期は4世紀末葉である（福辻・橘2015）。

②大和高田市池田4号墳から盾持ち人埴輪1点が出ている。古墳は馬見古墳群（南群）の盟主墳である築山古墳の南にあり、墳丘は削平されていたが、濠が巡っていたことで墳丘長約50mの前部後円墳と確認できた。盾持ち人埴輪は周濠から検出している。

盾持ち人埴輪は円筒埴輪との一体化技法で造られ、頭部は三角板鋏留衝角付冑を表現していた。顔は目・口を削り抜き、顔面装飾は鼻から目にかけて沈線を施していた。盾は長方形の粘土板を円筒埴輪に貼り合わせ、盾面の外区に鋸歯文、内区に格子文・綾杉文を表す。

古墳の築造時期は5世紀後半である（前澤2001）。

③広陵町寺戸鳥掛遺跡からは、墳丘の削平された古墳の周濠から盾持ち人埴輪2点を検出した。寺戸鳥掛古墳は馬見古墳群（中群）の乙女山古墳・池上古墳近辺にあり、

# 大倭氏に関する研究ノート

豊岡卓之

## 要旨

大倭氏は古代大和の雄族であるが、その実態は明確になっているとはいえない。古墳時代前期後半以後の王権の変動に関する議論と相まって、倭大國魂神の祭主を務めたとされる大倭氏の動向は、奈良盆地東南部の古墳時代中～後期の歴史を考える上で極めて重要な鍵になると思われる。本稿では大倭氏に関する文献を整理し、考古学上の情報を精査することで、古墳時代の大倭氏に関する歴史性について検証した。その過程で大倭氏が古代磯城の北西部を本拠としていたこと、彼らの奥津城が三宅古墳群である可能性の否定できないことを改めて確認した。また磐余市磯池の位置の推定を通じて市磯＝市師の意味を考え、大倭氏が大和川（初瀬川）の河川交通に関与し、軍団を率いてその統括にあたったことを推定した。

【キーワード】 三宅古墳群 市磯長尾市 磐余市磯池 大和川水運の軍事支配

## はじめに

大倭（倭）氏は『新撰姓氏録』大和国天神・天孫・地祇系氏族43氏のひとつであり、珍彦を遠祖とし、市磯長尾市を上祖とする雄族である。垂仁天皇紀25年3月条一云は、淳名城稚姫が祭主となって倭大國魂神を祭祀したが、やせ衰えて任に耐えられなくなり、祭主を市磯長尾市に交替させたと伝える。この伝承について、実のところ筆者は長く違和感を覚えてきた。古代東アジアでは、地神祭祀は地域支配の根幹である。『左氏春秋』僖公31年冬条に「…鬼神非其族類不歆其祀…」とあるように、地神祭祀は後裔氏族が司るものであった<sup>(1)</sup>。倭大國魂神は大和王権の本拠地の地神である。一方の市磯長尾市は珍彦の後裔とされ、イリを名にもつ王統（以下、イリ王統と略記）の族員ではない。『日本書紀』（以下、『紀』と略記）に長尾市とともに記された大田田根子が大物主神の直系子孫とされているのと比較しても、倭大國魂神祭主を後裔氏族員ではない市磯長尾市にしたとの伝えが特異であることは理解されよう。

市磯長尾市を倭大國魂神の祭主にしたというレトリックの背後に、なにかしら複雑な歴史が潜んでいると想像するのは私だけではないであろう。ましてや古墳時代中～後期の奈良盆地東南部の歴史動向については、不明な点が多い。現在、同地域の核心的遺跡である島の山古墳では史跡整備が実施されようとしており、三宅古墳群では保存のための調査が継続している。そうしたなかで大倭氏に関する歴史事象を整理することは、今後の奈良

盆地の古墳時代研究の一助になると確信する。

## 1 大倭氏の奥津城

### (1) 大倭氏の本拠

大倭氏関連記事については表1に抄録した。同氏が倭屯倉の経営をよく知る立場にあったことは、額田大中彦皇子と淤宇宿禰の倭屯田・屯倉支配に関する抗争に際して倭直吾子籠がよばれ、倭屯田は垂仁天皇の時に設けられて以来天皇のみに相伝されるものであると述べたとされることから窺える（仁徳天皇即位前紀）。直木孝次郎は、允恭天皇紀7年12月条の「至倭春日 食于櫟井上 弟姫親 賜酒于使主 慰其意 使主即至京 留弟姫於倭直吾子籠之家 復命天皇」に基づき、大倭氏の本拠を磯城郡もしくは同郡に北接する曾布郡南部と推定した（直木1975）。このことは、住吉仲皇子の乱を避けた去来穂別皇子が、竜田山から石上へ至る途中で倭直吾子籠の軍に遭遇したとされることから肯首される（履中天皇即位前紀）。倭直吾子籠は、遠江国大井川に流出した大木で船を造り、難波へ運航するために派遣されたと伝えられるから（仁徳天皇紀60年10月条）、大倭氏は造船と船舶運航に秀でた一族であり、居住地は水上交通と結びついていた。

倭直吾子籠は雄略天皇紀2年10月条で大倭国造と記された。欽明天皇紀23年7月条には倭国造手彦がみえる。大倭氏は天武天皇12年に連とされ、同14年には忌寸とされたが、天平9年（737）11月に大和小東人・水守が宿禰とされた際に、他族人は連とされた。天平14年（742）

# 南の内（宇智）と北の内の古墳群

泉 森 皎

## 要 旨

南の内（宇智）としたところは五條市近内地域を言う。ここは葛城山辺道や巨勢道が集合し、吉野川に沿って西に進めば紀伊国である。

この地域には近内籬子塚古墳をはじめ大・小の方墳・円墳、または埴製円筒棺や、円筒埴輪棺など多様な埋葬施設を主体部としている。

このような多様な埋葬施設を持つ地域として馬見古墳群に注目してみた。馬見古墳群の 200m クラスの大型前方後円墳を除外すると近内古墳群と共通するところが多くみられる。

一方、大和川の支流、佐保川を遡れば、山城国である。右に木津川、左に京奈和丘陵を見て古山陰・山陽道を北に進むと八幡市男山山塊に行き当たる。男山山塊には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳が継続して分布していてこの地の重要性が読み取れる。また盆地の中心部、内里には内神社が鎮座する。五條市の内神社は建内宿禰、八幡市の内神社は美甘内宿禰で両者は兄弟としている。『記紀』にみる神話伝承の世界を含め古代史を身近に読み取ることができる地域である。

【キーワード】近内古墳群と男山古墳群 南海道と古山陰・山陽道 南と北の内神社

## 1 五條地域への歴史の道

奈良盆地の西端を南北に走る道があって、近世では下街道と呼ばれている。馬見丘陵の東裾を葛城川に沿って南進すると、大和高田市の中心地今里から忍海、三室、五百家の集落に至る。ここまできると金剛山の山裾と巨勢山山塊に挟まれた谷筋を一路南に進んでいることになる。東側の谷底には旧国道 24 号の山道が今も残っていて、生活道路として使われている。西側に高鴨神社の森が見え、すぐそこが風森峠 (258.9m) である。現在の国道 24 号は葛城山辺道を踏襲したものである。市境は峠の南裾であるが、ここからは五條文化圏である。正面に近内丘陵が横たわり、その頂上部にお椀を伏せたような籬子塚古墳の墳丘が間近に迫ってくる。この地が近内古墳群の中心地域である。

飛鳥・藤原京城から五條地域に入るには巨勢道が最短ルートである。この道は明日香の南西部から高取町中央部を南南西に進み、佐田、松山、丹生谷、戸毛、古瀬、朝町、奉膳の谷筋を抜けて標高 202m の重阪峠につながる。

峠を越えれば三在・宇野で近内古墳群の南側にたどりつく。この道は古代では巨勢道、または紀路とも呼ばれ、近世では中街道と呼称していた。最初に紹介した葛城山

辺道は高野道、大和街道または下街道とも言い高野山参詣道として多くの人々に使われていた。

次にあまり知られていない道を紹介しておこう。近鉄橿原神宮前駅の西側に橿原神宮がある。さらに近鉄南大阪線の線路をへだてて久米寺がある。久米寺は白鳳期の創建寺院で巨大な塔跡が残っている。久米寺の南側一帯は白樫ニュータウンと呼ばれる住宅街が広がっている。ここは平安時代に築造された益田池跡で高取川（古代の久米川）を堰き止めた大堤が「益田池公園」として残されている。池堤に立って南西方向を望むと、新沢千塚古墳群の森を通して川西・一町の水田地帯が広がり、さらに背後に御所市茅原の森と金剛・葛城の山並が遠望できる。茅原は役小角（役行者）の生誕地で吉祥草寺という古寺がある。このあたりの水田畦畔や水路、農道に条里と異なる斜行道路の痕跡が残っている。新沢一、萩の本、観音寺、今出、秋津、中西、條・室の各遺跡の調査が進展しているが斜行道路と関係していないか、特に秋津遺跡で検出された古墳時代前期の大型建物群の中軸線の方位と一致しているのではないかと注目している。この斜行道路も御所市室の南西、宮戸橋の周辺で、前述の葛城山辺道（後の下街道）と合流する（泉森・米田 2021）。

# 初期須恵器に見られる地域色

—和歌山県紀ノ川下流域を中心として—

木下 亘

## 要 旨

紀ノ川下流域から出土する初期須恵器甕に見られる特徴的な製作技法として横位の平行叩きが挙げられる。この極めて特徴的な技法に注目し、その分布範囲を見るとその出土遺跡は紀ノ川下流域にほぼ限定され、中でもその北岸に分布の中心域がある事が分かる。この独特な叩き目を手掛かりとしてその流通圏を見ると、奈良県御所市の極楽寺ヒビキ遺跡にまで及ぶ事が判明した。奈良盆地への搬入経路は、紀ノ川の水運を利用し最終的に紀路を経て持ち込まれたものと考えられる。これらの須恵器は巨勢寺下層で確認された物流拠点的性格を持つ物資集積遺跡を通じ盆地南部に再配分されたものと考えられるが、盆地内への供給量は極めて限定的なものと言えるであろう。この特異な叩き技法は、所謂楠見式土器と呼ばれる一群の須恵器が持つ特色の1つと考えられ、紀ノ川下流域での初期須恵器の生産の可能性を強く意識させる特徴となっている。

【キーワード】 初期須恵器 横位平行叩き 紀ノ川 紀路 鳴滝遺跡 秋月遺跡 楠見遺跡 極楽寺ヒビキ遺跡

## はじめに

古墳時代中期に朝鮮半島からもたらされた硬質土器生産の技術は、我が国窯業史上大きな転機を与えたのは間違いない、大きなインパクトをもって受け入れられた。須恵器と言う従来の土器製作技術では成しえなかった硬質で保水性の高い大型土器の製作が可能になった事で、その生活様式にまで大きな変化を与えたに違いない。多くの場合、初期須恵器窯での大甕出土数が小型品を圧倒的に凌駕し、絶対的多数を占める点もこれを証左するものであろう。更に、短時間で急速に須恵器生産が列島各地に拡大していく状況は、須恵器と言うこの土器生産技術が如何に大きな影響力を持っていたかを如実に示している。

初期須恵器の研究は1960年代に開始された大阪府陶邑古窯跡群の大規模な調査の進展に伴い飛躍的に進展してきている。中でもTK73号窯や濁り池窯跡を始めとする一連の初期窯跡の調査が行われた事によって須恵器生産初期様相の一端が明らかとなった。更に1990年代初頭に行われたTG232・231号窯と言う初期須恵器窯の発掘調査は、須恵器の系譜を含め初須恵器生産開始期の様相をより具体的に示した点で画期的な発見であった。これらの窯跡の調査を通して初期須恵器の持つ形態や技法上の特徴が一層明確になり、列島各地域から出土する初期須恵器との比較が可能となってきている。近年では中樞

窯としての陶邑窯製品との比較を通じて、陶邑製品とは明らかに形態や製作技法或いは文様と言った点で趣を異にする初期須恵器の発見が相次いで知られる様になってきた。陶邑窯の供給範囲に入ると考えられる周辺地域に於いても、地域色の発露とも言える特徴を顕著に示す地域が存在する事が明らかとなってきている。その代表的な地域として和歌山県伊紀ノ川下流域と兵庫県播磨地域<sup>(1)</sup>を挙げる事ができる。何れの地域も中樞窯としての陶邑領域もしくはその周辺域に当たり、その供給範囲に恐らく入ると考えられる地域ではある。然し乍ら陶邑地域には確認されていない独特な器形や文様構成を示すものが近年では数多く知られるようになってきた。現時点に於いてその地域内で生産遺跡としての窯址発見には至っていないものの、この両地域は初期須恵器段階での生産の可能性を十分に秘めている地域と考えて良いと思われる。

此处では、この様に地域色としての特徴を顕著に示す初期須恵器を出土する地域の中から和歌山県紀ノ川下流域に焦点を当て、当該地域出土の初期須恵器が持つ地域的特色を抽出したいと思う。また、その特色を手掛かりとして紀ノ川下流域の初期須恵器の分布・流通範囲などについて明らかにしたい。

従来紀ノ川下流域で出土する初期須恵器には、陶邑窯製品には見られない幾つの特徴を持つ事が知られてきた。そこに見られる独特の特徴は全ての器種に見られる



# 大和におけるミヤケの一例

清水 康二

## 要 旨

ミヤケ関連地名の分布から、曲川遺跡、新堂遺跡、曾我遺跡を含む地域には、ミヤケが設定され、その設置開始時期を古墳時代中期前半と考えた。このミヤケの基本的な構成要素は、ヤケ、タ、クラに加えて、曾我遺跡の玉作工房と新堂遺跡近隣の初期馬匹生産にかかわる牧である。忌部山周辺を中心とした隣接地域に初期須恵器の生産地があれば、そこもミヤケに組み込まれていたと思われる。

このミヤケの管掌者は蘇我氏であり、牧の経営は後に倭馬飼氏となる渡来人の馬匹生産技術者集団、玉作工房の経営は後に忌部氏を名乗る前身集団がおこなった。新堂遺跡周辺には渡来人が集住しており、今回検討したミヤケも含めて、ミヤケの設置には渡来人の関与が濃厚に見受けられ、5世紀代のミヤケ設置の意義については、渡来人技術者集団とその係累を受け入れる場所を確保することが大きな理由の一つと考えた。

【キーワード】 屯倉 新堂遺跡 地名 渡来人 牧 玉作工房 初期須恵器 蘇我氏 馬匹生産 曾我遺跡 曲川遺跡

## はじめに

2016年度におこなわれた奈良県橿原市新堂遺跡の調査では、河道からではあるが、韓半島の陶質土器の形態をよく残した最古段階の初期須恵器が多量に出土し、あわせて韓式系土器も多量に出土したことから、具体的な生活遺構は確認できないものの、周辺には渡来人の旺盛な活動空間があったことが想定できた。さらに流路内からはウマ遺存体が複数出土したうえ、その中には若年個体が含まれていることから、周辺には牧などの馬を飼育する施設が想定されている（青柳 2019b）。

新堂遺跡の北には曲川遺跡があり、2000年代初頭に発掘調査がおこなわれ、古墳時代前期後半～中期末にいたる削平古墳が18基確認され、これらの一部は新堂遺跡の河道内から出土した重要資料であるウマ遺存体や初期須恵器と年代的に並行するものである（平岩ほか 2004、橿原市教委 2020）。加えて曲川遺跡と新堂遺跡を注目すべき理由は、遺存地名をもととして、この地域が屯倉の所在地であったと推定されているからである（千田 1975・1987）。

屯倉は大化前代の大王権の直轄地で、屯宅・屯家・官家等と表記されるが、いずれもミヤケと読まれている。さらに御田・屯田と書かれるものもミヤケと読むことがあることから、宅・倉・田、つまりは政庁と正倉及び水田が基本的な構成要素と理解されている（平野 1992）。

しかしながら、その実態については諸説あるうえに、ミヤケの設置開始時期についても6世紀以前とするか（米田 1963、平野 1992、鎌田 1993）、あるいは6世紀以後のことと考えるか（館野 1978）で大きな見解の相違がみられる。また、「部制やミヤケ制は、部やミヤケ（屯倉・官家）の名称を指標として、現代の研究者が制度の範疇で把握しようとした結果として生まれた概念」（溝口 2021, p.304）との理解もある。今回は、6世紀以前のミヤケ設置を肯定する立場に立って、新堂遺跡と曲川遺跡を中心とした発掘調査成果と周辺に残るミヤケ関連地名、ミヤケに関わる先行研究を参考として、古墳時代中期から後期の新堂遺跡と曲川遺跡周辺の歴史的位置づけをおこないたい。

## 1 曲川町周辺の遺跡概要

新堂遺跡および曲川遺跡の発掘調査報告書をもとに、以下、本論文と関係の深い古墳時代を中心とした重要遺構について記すこととする（橿原市教委 2018・2020）。

新堂町および曲川町周辺の低地に広がる新堂遺跡の北には曲川遺跡、南に東坊城遺跡が存在する。これらは、曾我川と葛城川に挟まれ東西約0.8km、南北2.0kmの範囲に所在する。

周辺では2000年代初頭から京奈和自動車道建設等に伴う発掘調査がおこなわれ、遺構が多数発見された。縄

# 古墳時代中期の鉄鉾副葬とその背景

—階層間・地域間比較を中心に—

平井 洸史

## 要 旨

本稿では、古墳時代中期の鉄鉾を取り上げ、鉄鉾（鉾先）の形態と武器・武具が反映する階層性との関係について検討を行った。その結果、より全長の大きい鉄鉾が有力墳に副葬されるという緩やかな相関をみるとともに、その傾向が中期前葉に始まり、「長身鎬式」（齊藤 2015）が創出される中期後半へと継続することを確認した。特に、広鋒長身3類が百舌鳥・古市古墳群で重視される傾向には、大型鉄鉾の副葬を支える列島内的意義づけの萌芽をみた。

韓半島に目を向けると、加耶地域の副葬様相が、古墳時代中期併行期を通じて最も倭に近いことが分かる。倭でみた階層的な位置づけは、それら地域との交流を背景とする可能性が高い。ただし、倭独自の型式・副葬規範などが認められることから、ヤマト王権を中心とする勢力は、鉄鉾の本格的な導入期から、外的影響を受け入れつつも国内的な副葬意義の創出に努めていたと推察した。

【キーワード】古墳時代 鉄鉾 階層性 地域性 大型品志向 対外交流

## はじめに

古墳時代中期には、鉄鉾はそれまで主流であった鉄ヤリに代わり副葬長柄武器の主要な位置を占めるようになる。それ以降、継続して副葬されるこの武器が、当該期の葬送儀礼、器物流通等を復元するうえで欠かすことのできない資料であることは疑いなく、鉄鉾が韓半島系器物であることを踏まえると、対外交渉の検討に資する点も大きい。そこで、本論は古墳時代中期の社会をさぐる一作業として、副葬鉄鉾の性格を、とくに武器が反映する階層性との関係に注目しながら検討を行ってみたい。

## 1 「鉄鉾と階層性」にかかわる既往の研究

古墳出土鉄鉾の研究は、後藤守一の検討（後藤 1928）以来継続的に進められ、とくに分類と編年についてはこれまで多くの検討が重ねられてきた（小林 1959、茂木 1980、白杵 1985、高田 1998、藤井 2007、富山 2017 ほか）。そのなかで、副葬鉄鉾の性格を多角的に論じた高田貫太の検討は斬新さを併せもつものであり、研究史上の定点となっている（高田 1998）。高田の論点は、鉄鉾の強い辟邪的性格をはじめとして多岐にわたる。本論で扱う階層性との関連でいえば、鉄鉾を複数副葬する古墳に有力墳が多いこと、そして中期後半の袋部多角形の鉄鉾、および後期に普及する三角穂式鉄鉾が、階層上位の古墳に

副葬される傾向を指摘しており、鉄鉾型式の違いに反映される階層差に着眼した検討はここから本格化したといってもよい。

この多角形袋部など装飾をもつ鉾については、韓半島出土資料を含めた視座からも朴天秀によってなされた（朴 1995・1999）。このとき朴は、倭においては、多角形袋部の鉄鉾と、袋部に銀の装飾を伴う鉄鉾が有力古墳から出土する点、そしてその一方で鑿付の鉄鉾が中間層以下の墳墓から出土している点を指摘している。

これらの研究に示されるように、古墳時代の鉄鉾に表示される階層性の検討は 1990 年代において、多角形袋部や銀装飾といった袋部装飾から進められてきたわけである。そしてその後、特徴的な身部形態へと検討が拡がる。齊藤大輔は、全長が 40cm 前後まで細長く長身化した鎬式鉄鉾を「長身鎬式」とし、それが中期後半の日本列島に数多くみられることを指摘したうえで、共伴遺物を含む出土様相の検討から、その階層的優位性を論じた。また、そうした長身の鉄鉾と短い鉄鉾をセットとする規範が、畿内を中心に中期後半の日本列島で共有されていたとする指摘も、当該期の鉄鉾の流通や武装論に関連して特筆される点である。

こうした一連の研究によって、中期後半の特殊な鉄鉾の性格は次第に明らかになってきたといえる。しかしここで、中期後半に至って倭の有力層がなぜこうした装飾や大型化によって視覚的効果を高めた鉾に価値を見出

# 佐紀古墳群東群における円筒埴輪配列

—大型前方後円墳周庭帯の配列変遷—

東 影 悠

## 要 旨

古墳時代中期にコナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳という3基の大型前方後円墳が断続的に築造された佐紀古墳群東群では、それぞれにおける周庭帯の円筒埴輪配列の様相が断片的ながらも明らかになっている。本稿では、その配列の特徴と円筒埴輪の特徴を検討することにより、佐紀古墳群東群の大型前方後円墳における周庭帯の円筒埴輪配列の変遷とその意義を明らかにした。上記した3基の周庭帯の埴輪配列には、円筒埴輪の規格、鱗付円筒埴輪、古墳の最外周部における大型円筒埴輪の点的配列など、連続する段階の変遷を追うことができた。このことは、円筒埴輪の規格に認められた緩やかな系譜関係とも相関し、埴輪生産と埴輪配列が有機的に関連するものであったことを具体的に示した。

【キーワード】 佐紀古墳群 コナベ古墳 ウワナベ古墳 ヒシャゲ古墳 埴輪配列

## はじめに

古墳時代中期前半から後半にかけてコナベ古墳、ウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳という3基の大型前方後円墳が断続的に築造された佐紀古墳群東群(図1)では、それぞれにおける周庭帯(末永1962)の円筒埴輪配列の様相が断片的ながらも明らかになっている。本稿では、その配列の特徴と円筒埴輪の様相を検討することによって、佐紀古墳群東群の大型前方後円墳における周庭帯の円筒埴輪配列の変遷とその意義を明らかにする。周庭帯の円筒埴輪配列については、密に並べることを基本とする墳丘本体の円筒埴輪配列と比較して古墳それぞれの個性が発現しやすいと想定され、その特徴を検討し、その系譜関係等を整理することは、各古墳の築造背景を明らかにするうえでも有効な視点と考える。なお、本稿で記載する埴輪の編年的位置づけは埴輪検討会の作成した編年(埴輪検討会事務局2022)に基づくものとする。

## 1 コナベ古墳の埴輪配列

コナベ古墳は墳丘長約210mの前方後円墳であり、墳丘の周囲に周濠と外堤、外堤外側に外周溝がめぐる(図2)。中期前半の築造とみられ、円筒埴輪編年ではⅢ期に位置付けられる。

コナベ古墳の墳丘部分では、第1段テラス面上と西側造出で円筒埴輪列が確認されている(宮内庁書陵部

2011)。第1段テラス面では、後円部および前方部の主軸上でそれぞれ円筒埴輪列が検出され、後円部では底部の直径約22~25cm、前方部では底部の直径約30cmの円筒埴輪がともに芯々間距離35~40cmで密に並べられていた。第1段テラス面では、朝顔形埴輪も樹立されていたようで、後円部の出土状況から朝顔形埴輪1本+円筒埴輪4本という規則的配列の可能性が指摘されている。

西側造出の上面は、その南北で上下の段差が付くようにつくられている。上段となる造出南半では底部の直径約20cmとやや小型の円筒埴輪が芯々間距離約50cmと後述する下段に比べやや間隔をあけて並べられていたが、3個体のみ確認であり、この間隔での配列が全体を通じて認められるかどうかは不明である。

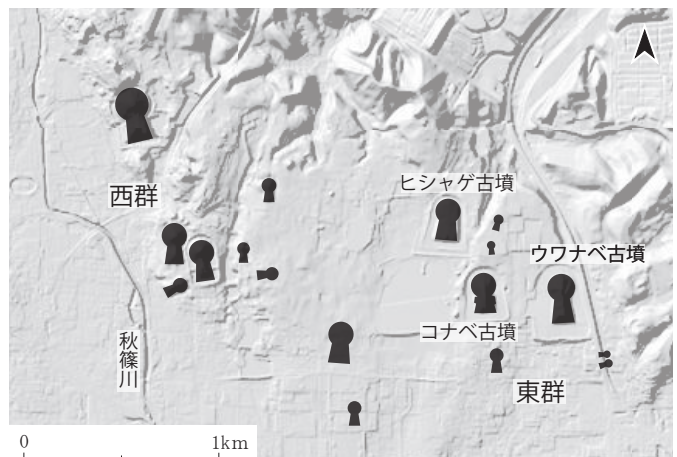


図1 佐紀古墳群における主要前方後円墳の分布

# 傍丘磐杯丘北陵と南陵について

—地名と兆域から見た考察—

米田 敏幸

## 要 旨

大和国葛下郡に所在する傍丘磐杯丘陵については、狐井城山古墳が該当するとされるが傍丘磐杯丘陵は2つあり、もう1つの傍丘磐杯丘陵については諸説ある。しかし『延喜式諸陵寮』の記載を見る限り葛下郡内に両陵はあり、同じ規模の兆域を持っている。その1つが狐井城山古墳とすれば、それに該当する古墳は南に5km離れた新庄屋敷山古墳しかない。しかし「傍丘磐杯丘」という地名は現在まで残っていないことから現在に残る「片岡」に類似する地名と「岩」や「石」地名を採すしかなく、大和国条里復原図と大和地名大辞典を基に古代の「傍丘」の範囲と「磐杯」の位置を推定してみた。また『延喜式諸陵寮』の兆域を同地域の大型前方後円墳に当てはめてみた。その結果、両古墳が『延喜式諸陵寮』記載の陵墓とするのが妥当であるとの結論を得た。さらに顕宗・武烈天皇陵の真陵について埴輪編年と須恵器編年を基に前後関係の考古学的な検討を試みた。

【キーワード】傍丘磐杯丘陵 顕宗 武烈 狐井城山古墳 狐井稲荷古墳 屋敷山古墳 南花内大塚古墳

## はじめに

大和国葛下郡に所在する「傍丘磐杯丘陵」については、塚口義信氏と白石太一郎氏によって香芝市狐井所在の狐井城山古墳が該当するとされ、文献史的にも考古学的にもその点については見解の一致をみている。おそらくそれ以外に天皇陵に相応しい古墳はこの地域には見当たらず、そのことに異を唱えることはできないであろう。狐井城山古墳は、継体天皇の「三嶋藍野陵」として今城塚古墳を真陵とするのと同じく天皇陵の陵墓治定を再考する上で重要な古墳であることは言うまでもない。しかし『記』『紀』『延喜式』とも「傍丘磐杯丘陵」は2つあり、1つは顕宗天皇陵であり、もう1つは武烈天皇陵であるとする。狐井城山古墳がどちらの陵に該当するかについては、それを土師氏の野見宿禰伝承を根拠としてこれを武烈天皇とする塚口氏<sup>(1)</sup>と武烈天皇の存在を否定して顕宗天皇陵とする白石氏との間に見解の相違が見られる<sup>(2)</sup>。

塚口氏の文献史学的な見解では、香芝市磯壁の「伝腰折田」の地名から垂仁紀の野見宿禰伝承によりそこに土師氏が居住したものとして土師氏が天皇陵の築造に関わったこと、6世紀初頭の築造年代、大王墓級の古墳、天皇陵の伝承等から「狐井城山古墳が武烈天皇陵である可能性がすこぶる強いと言ってよい」とされている。

白石氏の考古学的な見解によれば「狐井城山古墳が5世紀末から6世紀初頭頃の大王墓であることは疑いなく

おそらく顕宗大王の墓であろう」としている。そして「南陵の顕宗陵が狐井城山古墳とすると北陵の武烈陵は狐井稲荷山古墳に比定されていた可能性が大きい」として傍丘磐杯丘陵の両陵を推定されている。

傍丘磐杯丘陵について筆者は、葛下郡の古墳の中で、『延喜式諸陵寮』の「傍丘磐杯丘陵南陵」、「北陵」の記載と同様に「兆域東西二町、南北三町」と同規模の兆域が記載されていることにより、位置関係と古墳の規模から横大路を挟んで南北5km離れた距離に所在する墳長140mの大型前方後円墳である屋敷山古墳と狐井城山古墳が該当すると考え、屋敷山古墳を南陵に、狐井城山古墳を北陵に該当するとの見解を「傍丘磐杯丘陵考」として提示した<sup>(3)</sup>。

その後白石太一郎氏からは考古学的見地から、塚口義信氏からは文献史学的見地から小稿に対するご批判をいただいた。

白石氏の批判<sup>(4)</sup>は、「1. 同じ陵名をもつ陵に「北・南」などの方位、相対的位置関係を付して呼び分けた陵名は、同じ地名の至近距離にある陵を方位などで呼び分けるもので、5kmも離れた別の地の陵を南北で区別したなどとは考え難い。2. 屋敷山古墳の円筒埴輪は第IV段階のもので、IV段階のものも残るが、すでに第V段階の埴輪を多く持っている古市古墳群の藤井寺市岡ミサンザイ古墳よりは明らかに古い古墳で岡ミサンザイを雄略の墓とすれば雄略の2代後の顕宗の没年までは下らない」とされる。

# 後期大和王権の東国支配

—特に常陸久自国を中心に—

茂木雅博

## 要旨

我が国は紀元3世紀後半に中国の三国魏と冊封関係を結んだ。そして寿陵制を前提とする前方後円墳体制と仮称する独自の大和王権を誕生させ、魏の傘下に組み込まれた。

この王権は東北の化外と接する常陸域の久自国を冊封域の北限として、直接支配した。その証左は纏向型前方後円墳や特殊器台及び特殊壺を装置とする寿陵に端的に現れ、大和王権後期の倭王武の治天下制が採用されると、王権は冊封体制から離脱する傾向が見られ、前方後円墳を中心とする寿陵による厚葬制は衰退した。こうした大和王権中央の動向は久自国の墓葬にも見られ、更に律令国家萌芽の痕跡が久慈川の支流玉川の転石を使用した瑪瑙製玉作生産や『斉民要術』から学んだ養蚕に依る絹織物生産及び化外同化策としての屯田兵制が採用されたと推定される事が考古学的事象の一端から想定されると推論した。

【キーワード】 冊封体制 纏向型前方後円墳の伝播 治天下制 常陸域の久自国王墓

## 1 問題の所在

『常陸国風土記』の冒頭に「古老相傳舊聞事」として、以下の文章が記録されている。

「古者、自相模國足柄岳坂以東諸縣、惣稱我姫國。是當時、不言常陸。唯稱新治筑波茨城那賀久慈多珂國、各遣造別令檢校。」とある(久松1959)。

常陸国風土記の編纂が藤原宇合によって養老年中に実施されたとしたら、この記録は最古の国造制に関する文字資料であり、『日本書紀』孝徳天皇大化2年の東方八道(相模・武蔵・上総・下総・上毛野・下毛野・常陸・陸奥)以前の後期大和王権の東国支配を理解する基本的な記載であると筆者は理解している<sup>(1)</sup>。

更に下毛野国にはこれよりも早い「那須国造碑」という金文資料が存在する。この碑文は王仲殊氏の解釈によると、「永昌元年(689)年四月、那須国造追大壹那須直韋提が評督の官職を賜る。そして、庚子年(700)正月二日になくなったので、意斯麻呂等が碑を建立して、その功徳を刻み大きく称賛した。」(王2003)これによれば紀元689年には東国八道の下毛野の那須国に国造が設置された絶対年代を知る事が出来る。平安時代の写本と云われる国造本紀によれば、那須国造は「纏向日代朝御世(景行天皇)、以建沼河命孫大臣命、定賜国造。」と見える。常陸に目を転じると、新治国造は「志賀高穴穂朝御世(成務天皇)、以美都呂伎命児比奈羅布命、定賜国造。筑波国造は志賀高穴穂朝御世(成務天皇)、以忍凝見命孫、

阿閉色命、定賜国造。茨城国造は軽島豊明朝御世(応神天皇)、以天津彦根命、孫筑紫刀禰、定賜国造。」仲国造は「志賀高穴穂朝御世(成務天皇)、以伊豫国造同祖、建借馬命、定賜国造。久自国造志賀高穴穂朝御世(成務天皇)、以物部連祖射香色雄命三世孫、船瀬足尼、定賜国造。」高国造は「志賀高穴穂朝世(成務天皇)、以彌都侶岐命孫、彌佐比命、定賜国造。」と記されており、これ等を整理すると景行天皇を最初として常陸域では成務天皇及び応神天皇の時期に国造が配置された事になる(栗田1903)。

しかし井上光貞氏によると、『国造本紀』は成立が不分明で、信憑性が信じがたいとして、『常陸国風土記』に見える新治国、筑波国、茨城国、那賀国、久慈国、多賀国等を国造支配域として整理されている(井上1985)。その上で氏は「大化改新と東国」で、東国の性格について大変示唆に富む視点を披露されている。それは文献史学の枠を超える学際的に考古学が回答を求められた大きく2点であるが、その第一は「一般には、刀甲弓矢などの武器は、これを農民からとりあげて公の武器庫におさめさせたのであるが、ただ東北辺の蝦夷と境を接する地域に限っては、一たん収公した武器を、おそらくは常に兵力を忽せにすることはならないために、本主すなわち、その農民に逐一還すことにしたのである。」第二点は「大化元年八月の地方官の派遣において、東国と大和の六県の二つだけであった。…何故に、この二地域にだけ、先だって地方官を派遣したかということである。」(井上



# 藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具と 「移動する（渡来系）工人ネットワーク」

—久野雄一郎氏から研究の継続を託されて—

鈴木 勉

## 要 旨

元・橿原考古学研究所研究員久野雄一郎氏は、藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具Aセットの成分分析を担当され、鍛造・彫金製であるとの分析結果を得た。しかし、その後の実物調査で氏は、鑄造・彫金製の可能性を示唆された。逝去の直前、筆者は氏からの「後を託した」とのお言葉によって、氏の研究を受け継いだ。氏に背中を押されて筆者は、古代韓半島に類例を求めて調査を重ねた。その結果、韓半島三国時代に精密鑄造法の存在を複数確認し、さらに鑄造・彫金製遺物から極東アジアの毛彫りの源流とも言うべき資料を発見した。それらの技術移転が、「大和王権下か地方政権下か」という考古学特有の二者択一の製作地論ではなく、中国北朝から百済を経て日本列島へと「移動する（渡来系）工人ネットワーク」に乗ってもたらされたものであり、彼らの手で日本列島で製作されたことが確認された。

【キーワード】藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具 移動する（渡来系）工人ネットワーク 鑄造技術 毛彫り技術 飾履塚飾履

## 1 久野雄一郎氏の研究

### (1) 久野雄一郎氏から託された研究課題

1985年、奈良県斑鳩藤ノ木古墳から精緻で豪華な金銅製馬具Aセット（以後、藤ノ木馬具）が出土した。橿原考古学研究所初代所長の末永雅雄氏は「70年間さまざまな出土品を見てきたが、驚くべき発見といってもよい。図像文様の立体的な彫金技術は、馬具では初めて目にするものだ」と評した。日本ばかりでなく東アジアの考古学界や金工史学界が激震した。

藤ノ木馬具の金属学的調査を担当した故久野雄一郎氏は、昭和61年9月に開催された公開研究会で次のように発表した。

試料は亀甲繫文の一辺を含んだ透彫文の一部と考えられる。（中略）

金属銅は、結晶粒度が0.05mmの再結晶組織である。焼鈍双晶も認められる。

金属銅の領域をEPMAにより定量分析した結果、銅99.5%以上、鉄および砒素がそれぞれ0.1%含まれ（中略）、製作法は鍛金によって作った銅板を透彫りした後に金鍍金を施し、…（久野1986）

つまり、藤ノ木馬具を「鍛造・彫金製」としたのである。同じく金工技術の調査を担当していた鈴木は、それから鍛造製彫金仕上げとして研究を進めた（鈴木・松林1990）。

ところが久野氏は、1990年刊行の『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』において、先の公開研究会の記述を引用しつつ、末尾に次のような文章を載せられた。

金属組織観察において認められた原始の組織はすべて銅の再結晶組織である。この事実は鑄造組織が鍛造過程によって破壊された後、300℃以上に加熱されたため再結晶したことを示している。

後輪試料を肉眼観察した際、その表面状態から鑄造粗板を仕上げたものと考えたが金属組織を観察した結果、鍛金された銅板を透彫りしたものと考えた。

本試料は後輪の海金具の一部と考えられ、この考えは、後輪の海金具全体についてはない。

（久野1990）

つまり久野氏が分析した資料は鍛造製であるが、「この考えは、後輪の海金具全体についてはない。」として、藤ノ木馬具の主要部分は鑄造製ではないかと問題提起したのだ。

ここで確認しておきたいことは、久野氏が分析した「後輪資料」は、金銅製鞍金具の海金具の一部を切断して得たものではなく、発掘担当者が鞍金具の近辺から出土した破片をその形状から海金具の亀甲繫文の一部と判断して久野氏に託したことである。

果たして藤ノ木馬具は鑄造・彫金製か、あるいは鍛造・彫金製か。現在藤ノ木馬具は一括して国宝指定されている。

# 鋌頭型棺釘を用いた飛鳥時代木棺の構造と展開

中野 咲

## 要 旨

鋌頭型棺釘を用いた木棺は古墳時代後期後半に出現し、飛鳥時代にかけて展開するが、畿内においては客体的であり、中小規模墳に採用された。この棺は釘の頭に装飾的な効果を持たせ、鋌頭型棺（釘）釘や金銀のかぶせを施した銅鋌、鍔座金具などで装飾されたものであり、釘の用い方は様々で、多様な棺の姿が想定される。棺の系譜は百済に求められ、棺が被葬者自身を象徴するものととらえ、埋棺儀礼を重視する葬法を象徴するものである。釘や鋌による棺の装飾は、古墳時代の釘付式木棺には認められず、飛鳥時代に畿内の王陵級の古墳においては、黒漆塗で鍔座金具を用いて装飾する漆棺が採用されるが、釘の頭を見せないことが特徴である。ここに埋棺儀礼を重視しない日本の葬法の特質の一端が現れており、百済から導入された新たな葬法が変質して受容されたことがうかがえる。

【キーワード】 鋌頭型棺釘 飛鳥時代木棺 構造の復元 持ちほこぶ棺 埋棺儀礼 百済

## はじめに

本稿は、鋌頭型棺釘（図1・瀬川 2005）<sup>(1)</sup>を用いた木棺の構造復元を基に飛鳥時代の棺の姿と葬法の実像に迫る試論である。

古墳時代から飛鳥時代の葬送儀礼においては、被葬者の遺骸が最も重要とされ、遺骸を棺に密封する納棺儀礼が最も重視される（和田 1995）。日本の伝統的な棺は、基本的に埋葬施設に据えつけられたもので、そこに遺骸を運び込む葬法が古墳時代後期に横穴系の埋葬施設が導入された後も継続していた。古墳時代後期の畿内の有力古墳においては、巨石を用いた横穴式石室に重厚な刳貫式家形石棺を設置し、そこに遺骸を搬入した。納棺儀礼

の場は石室内にあったのである。一方、飛鳥時代後半になると、韓半島から遺骸運搬具として棺を使用する葬法が畿内の有力古墳に導入される。当該期の畿内の有力古墳においては、横口式石槨に、遺骸を納めた漆塗木棺や夾紵棺、漆塗籠棺といった漆棺を搬入した。納棺儀礼の場は古墳から離れ、モガリ儀礼に吸収されたとみられている。このような古墳時代から飛鳥時代にかけての畿内の有力古墳における葬法の変化は、納棺儀礼の変質と理解されており、棺の用法の変化に着目して「据えつける棺」から「持ちほこぶ棺」へ（和田 1995）と端的に表現されている。

一方、一部の中小規模墳においては、横穴式石室の導入期より釘付式木棺が使用された。釘付式木棺は畿内の渡来系要素の強い群集墳を中心に速やかに普及し（瀬川 2005）、大型横穴式石室の追葬棺としても使用された。この釘付式木棺の性格については、初期には棺材が厚く大型で中期以来の組合式木棺の伝統・様相を強く残した据えつける棺であったと理解されている<sup>(2)</sup>。一方、古墳時代後期後半になると、棺材の厚さの減少・鉄釘の小型化などの傾向が現れることから、この時期に持ちほこぶ棺に用法が変化すると指摘され（田中 1978）、「重い棺」から「軽い棺」へ（千賀 1994）と表現されている。

なお、前述のように首長墓と群集墳の納棺儀礼の変質には、時期差があることは注意されてきた（千賀 1994、和田 1995）が、大阪府シシヨツカ古墳において、古墳時代末から飛鳥時代初頭の漆塗籠棺を納めた横口式石槨が

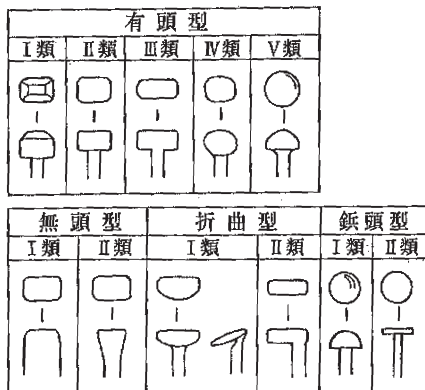


図1 棺釘の頭部形態の分類（瀬川 2005）



# 飛鳥時代後半の終末期古墳における棺と棺台

岡林孝作

## 要旨

飛鳥時代後半の終末期古墳に採用された最上位の棺形態である夾紵棺や漆塗木棺は、前段階の家形石棺とは大きく異なり、新たな素材、技法によって製作され、棺台を使用したそれまでにない安置方式が採用される。しかし、1934年に偶然発見された大阪府阿武山古墳の夾紵棺を除けば、その形態や構造の全体像を直接知ることはほぼ困難であり、棺台についても無機質材料による遺存例のほかは、木製棺台に関する具体的な知見は少ない。こうした状況を踏まえ、改めて奈良県明日香村高松塚古墳の漆塗木棺・棺台の復元案を整理することで、飛鳥時代後半の終末期古墳における夾紵棺・漆塗木棺、木製棺台の全体像を示した。その結果、飛鳥時代後半の終末期古墳における最上位の棺形態である夾紵棺・漆塗木棺は、飛鳥時代前半の終末期古墳における最上位の棺形態である家形石棺の末期的形態と共通の外観を有することを明らかにした。

【キーワード】 飛鳥時代 終末期古墳 夾紵棺 漆塗木棺 棺台 高松塚古墳

## はじめに

畿内地域の後期古墳における最上位の埋葬形態は、横穴式石室と家形石棺の組み合わせである。飛鳥時代前半の終末期古墳においても、引き続きこの状況に大きな変化はない。いっぽう、7世紀中葉を移行期として、終末期古墳における最上位の埋葬形態は横口式石槨と夾紵棺・漆塗木棺の組み合わせへと変化する。家形石棺は棺台を使用することはないが、夾紵棺や漆塗木棺には棺台をとともなうことも知られている。

飛鳥時代後半の終末期古墳に採用された最上位の棺形態である夾紵棺や漆塗木棺は、当時の木工、漆工、金工といった各種技術の粋を集めた工芸品というべきものである。1934年の工事中に偶然発見された大阪府高槻市阿武山古墳では、未盗掘の石槨内に、ほぼ完全な状態の夾紵棺と、それをのせた磚積みの棺台が遺存していた(梅原1936)。7世紀後半の終末期古墳の横口式石槨内に安置された夾紵棺と棺台の全体像を具体的に知ることのできる貴重な資料である。

しかしながら、阿武山古墳を除けば、夾紵棺や漆塗木棺の大部分は盗掘による攪乱や保存環境の諸条件によって断片化し、その形態や構造の全体像を直接知ることはほぼ困難である。また、棺台については、阿武山古墳の磚積棺台のほか、石製などの無機質材料による遺存例が知られているが、少なからず存在したと考えられる木製棺台の具体的な遺存例はない。

このように、飛鳥時代後半の終末期古墳における夾紵棺や漆塗木棺、それをのせるための棺台については、依然として不明な点が多い。そうした状況のなかで、これまで唯一の完存例である阿武山古墳例を参考にしつつ、断片的な手がかりをもとにその全体像を具体化する努力がおこなわれてきた。たとえば、奈良県高市郡明日香村牽牛子塚古墳から出土した多数の夾紵棺断片の詳細な検討から、本来2個納められていた夾紵棺の横断面想定復元案が示されたことは、部分的な復元案ではあるものの、これらの夾紵棺の全体的なイメージを復元するための前提的作業として評価すべきものである(図7)(米田1977)。

筆者もこれまで、奈良県高市郡明日香村高松塚古墳の漆塗木棺および棺台を主な対象として、その形態や構造の全体像を復元する作業に取り組んできた。一連の作業は、後世の盗掘に際して石槨壁面に残された棺・棺台の接触痕跡や、床面に残された棺台の設置痕跡などを積極的に復元のための根拠として取り上げるとともに、多数出土している漆塗木棺の残片をデジタルマイクروسコープなども使用して詳細に観察し、胎である木材の接合状況や木取りなどから部位を特定することで、総合的にその全体像を再現しようとする新たな方法論に立つ。その作業結果については、これまで橿原考古学研究所附属博物館保管資料の再整理報告、2006～07年の石槨解体のための発掘調査報告などで随時公表してきたところである(岡林2011・2017)。

# 野中寺弥勒菩薩半跏像銘文論

東野 治之

## 要 旨

大阪府羽曳野市の野中寺に蔵される弥勒菩薩半跏像は、その台座銘に丙寅年（666年）の年紀を有し、最古の確実な弥勒半跏像として有名であるばかりでなく、文中の「中宮天皇」や寺名を巡って多くの議論が重ねられてきた。ただその銘文については、666年当時のものとするには疑問があり、かつて後代の作とする説を提起したことがある。本稿では、その後出た美術史家の所説や金属組成の分析結果等を改めて検討し、前説を一部訂正するとともに、その後の知見を補足して、本像の銘文が後代のものであることを再論した。

【キーワード】野中寺 弥勒菩薩半跏像 台座銘 金石文 木簡 和風漢文 中宮天皇

## はじめに

大正7年（1918）、大阪府野中寺の蔵から発見された金銅製の菩薩半跏像は、その台座框の銘文に「丙寅年」四月八日の日付を持ち、尊像名を「弥勒御像」と明記する点で、日本古代の金銅仏中でもとりわけ有名な存在となつて今日に至っている。その丙寅年は、日に併記された十二直の「開」から、天智天皇5年（666）と確定され、干支による紀年でありながら、絶対年代を決定できるのが大きな強みと言えよう。

しかし、この銘文には検討を要する点が少なくないのも事実である。文中の「中宮天皇」とは誰か、日付の「四月大」の次の字は何と読むべきか、発願者の関係する寺の名の一字は何と解すべきか、といった諸点は、これまでの研究者が常に取り上げて来た問題点であるが、そのような個々の疑問よりも根本的なこととして、この銘文は上代の文章<sup>(1)</sup>として、いかに読み下されるのかという課題がある。こうした金石文や、あるいは木簡などの場合、かつてはその字面を追い、おおまかに意味を取って済ませることも珍しくなかったが、近年では国語史研究者の関心が高まったこともあって、文字に即し文章として読み解くことが普遍的となりつつある。しかし、この銘文について、全ての文字を生かした訓読文を提示することは決して容易でなく、種々の疑問に遭遇するのが実情である。

以上のような認識のもとに、私は以前一文を草して、この銘文は後代の作ではないかと問題を提起したことがあった（東野2000）。この私見をめぐっては、麻木脩平氏から反論をいただいたが（麻木2001）、麻木氏に一度

反論（東野2001）を呈しただけで終わっている（麻木2002はそれに対する反論）。その後、野中寺から、それまで知られなかった近世の仏像目録が見つかったことや、像自体の金属組成についての知見が示されたことを踏まえ（藤岡2014）、近年では像は勿論、銘文も当初の作でよいとする見解が確定したかにみえる。しかし、その実この銘文に対する疑念は少しも解消していない。ここに改めて疑問点をまとめて識者の指正を仰ぐこととした。

## 1 文体について

まず私見に基づき銘文の全文を掲げる（／は改行箇所）。この銘文の文字について、異なった読みを主張する説も少なくないが、明らかに実物の文字からは無理な釈読<sup>(2)</sup>には触れることを省き、重要な異説に関しては後段で取り上げる。

丙寅／年四／月大／旧八／日癸／卯開／記栢／寺智  
／識之／等詣／中宮／天皇／大御／身勞／坐之／時  
誓／願之／奉弥／勒御／像也／友等／人数／一百  
十八／是依／六道／四生／人等／此教／可相／之也  
先ず文体から見てゆくと、このような文字列の背後に想定できるのは、次のような上代の文章である。

丙寅年、四月大、旧八日癸卯開に記す。栢寺の智識（之）等、中宮天皇の大御身勞き坐しし（之）時に詣り、誓願し（之）奉る弥勒の御像也。友等人数一百十八、是れに依り、六道四生の人等、此の教に相う可き（之）也。 \*括弧内は原文の「之」の位置  
こう読めば、文意はほぼ明瞭と言ってよい。古代の金石文や木簡には、「…年…月…日記」で始まる例がまま

# 夏見廃寺出土大型多尊埴仏の制作とその背景

—持統朝の仏事—

清水昭博

## 要旨

本論では三重県名張市夏見に所在する夏見廃寺から出土する大型多尊埴仏の制作とその背景について検討した。その結果、甲午年（持統8年）の銘をもつ大型多尊埴仏は、藤原宮遷都前後の時期に持統天皇によっておこなわれた仏事の一環として、天武天皇の供養のために制作され、天武天皇家に関わる寺を中心に配布、供養されたものと考えた。また、夏見廃寺は大型多尊埴仏の出土からも天武天皇家との関係が考えられ、『薬師寺縁起』に昌福寺が天武天皇のために建立されたと記載することにも一定の根拠があることを指摘した。

【キーワード】埴仏 夏見廃寺 天武天皇 持統天皇

## はじめに

本論では三重県名張市夏見に所在する夏見廃寺から出土した大型多尊埴仏の制作とその背景について検討する。夏見廃寺から出土した大型多尊埴仏は甲午年（持統8・694年）の紀年銘をもつ。日本の埴仏で年号を記した唯一の埴仏であり、甲午年という年に大型多尊埴仏を制作することに意味があったと筆者は考える。

以下、本論では、持統8年の藤原宮遷都頃に持統天皇によっておこなわれた仏事の一環として、大型多尊埴仏が天武天皇の供養のために制作され、天武天皇家に関わる寺を中心に配布、供養されたとの仮説を示したいと思う<sup>(1)</sup>。

## 1 夏見廃寺と昌福寺

夏見廃寺は三重県名張市夏見に所在する。昭和59・60年（1984・1985）に実施された名張市教育委員会による発掘調査で、東西に塔と金堂を配し、その南西に講堂を置く特異な伽藍配置をもつことが明らかになっている（図1、水口1988a）。創建年代については、金堂と塔・講堂の建てられた時期には差があり、金堂は後述する埴仏の年代観から持統8年（694）前後、塔・講堂は8世紀中頃と考えられている（水口1988a）。

平安時代中期に撰述された『薬師寺縁起』は伊賀国名張郡の昌福寺について記す（「大来皇女 最初齋宮 以神亀二年 奉為浄原天皇 建立昌福寺 字夏見 本在伊賀国名張郡」）。縁起によると、伊賀国名張郡夏見の地に建立された昌福寺は、神亀2年（725）に大来皇女が天武天皇

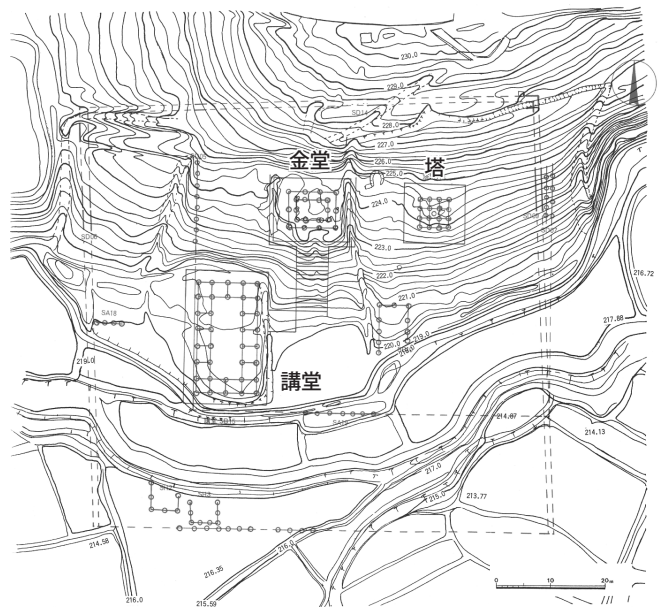


図1 夏見廃寺伽藍配置図

のため建立したという。

大来皇女は天武天皇を父、太田皇女を母として斉明7年（661）に誕生した。同母弟には大津皇子がいる。大来皇女は天武2年（674）から11年間、伊勢齋宮として奉仕した。その後、朱鳥元年（686）に都であった飛鳥に戻り、大宝元年（701）に死亡している。

夏見廃寺は夏見の地にある唯一の寺院跡である。また、発掘調査によって奈良時代に存在したことも明らかであり、縁起が記す昌福寺であることは間違いないであろう。

縁起は昌福寺の建立を神亀2年（725）とする。しかし、

# 下駄のなかの花鳥風月

—下駄に描かれた精神世界—

本村 充保

## 要 旨

筆者はかつて下駄は、古代では祭祀行為に伴う装束として使用され、中世に日常の履物へと転換し、織豊期における城下町の成立を契機として、庶民の履物として定着していったと評価した。その際は、触れなかったが、下駄には線刻や刻印により施文する事例がある。本稿では、施文の種類と特徴について紹介する。

施文は、下川津遺跡から出土した7世紀～8世紀前半の下駄に描かれた線刻画を初現として、古代に遡る事例もあるが、事例が増加するのは、16世紀後半以降である。種類としては、線刻画のほか、「○」・「△」などの記号や、屋号や家紋を施文するものが多い。このほか、魔除け的な意味合いで施文されたものもある。施文の時期的変遷によれば、中世以前は線刻画など個人の趣向がうかがえるのに対し、近世になると屋号の比率が高くなり、所有者を示す記号へと転化したと考えられる。

【キーワード】下駄の施文 線刻 刻印 魔除け的な文様 個人の趣向 所有者を示す記号

## はじめに

日本人にとって、下駄はなじみ深い履物である。靴を履いて生活する現代社会にあっても、例えば「浴衣に下駄」は日本の夏の風物詩であり、外国人観光客にも人気の高い和装の一つといえるだろう。考古遺物としての下駄も、木製品という比較的腐植しやすい材質でありながらも、全国で14,000点を超える事例が報告されるなど、日本の履物史を考えるうえで欠かすことのできない重要な資料群として位置づけられる。

筆者もこれまで下駄について論考を発表してきたが、その際には、形態的特徴をもとに下駄を形式分類し、時期的変遷や地域性について検討することに重点をおいてきた。このような検討を通じて、日本の下駄は、古代においては祭祀行為に伴う装束の一部として受容され、過渡期的段階である中世を経て、織豊期における城下町の成立を契機として、日常的な庶民の履物として定着していったと結論づけた(本村2022)。

本稿では、このような検討とは少し違った角度から下駄について論じてみたい。具体的には、下駄に刻まれた線刻や刻印について、どのような種類があるのか、それらの時期的変遷などの特徴はどのような傾向を示すのかを検討し、施文行為からみた当時の人々の想いを掘り下げてみたい。

## 1 施文の種類と施文位置の分類

下駄の施文法には、「線刻」・「刻印」・「墨書」の3種類がある。以下のように分類する(図1)。

線刻：小刀のような鋭利な刃物で細い線を施すものと、彫刻刀や棒状の工具を用いて太い線を施すものがある。前者には×型のような単純なものから、線刻画のような複雑なものまで、多様な表現がみられる。後者は一本線など単純な表現になることが多い。なお、下駄の表面に刃物傷がついた事例が多数確認できる。それらの多くは意図的な「線刻」ではなく、単なる「傷」であり、カッティングマットのような下敷きに転用した痕跡と考えられる。両者を厳密に区別することは難しいが、筆者が意図的に施文したものだと判断したものを対象とした。

刻印：金属製の判子や銭貨を熱して押印した焼印のほか、

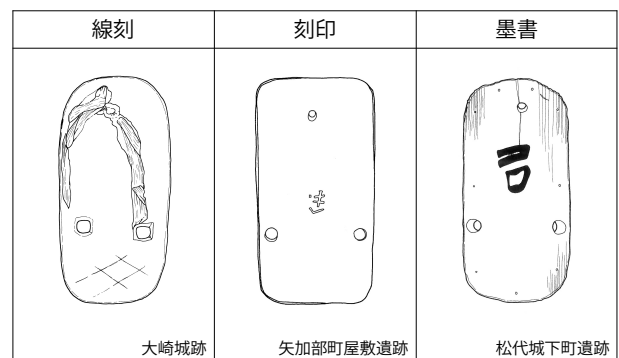


図1 施文の種類による分類

# 豊後の大神氏と三輪氏と小蛇の神

田中久夫

## 要旨

日本の蛇の信仰は地方の大蛇から始まり、これに対するに天皇の小蛇が生まれ、そこから和気清麻呂の足を治した五色の小蛇が生まれたことを考えた。五色の小蛇は称徳天皇の決定を否定したのである。五色の小蛇は宇佐八幡の神であったのであろうか、三輪氏の神であったのかこれが次に残された問題である。

【キーワード】大神氏 地方豪族の中央への進出 美濃しき小蛇 三輪の神と賀茂の神の御正体 和気清麻呂

## はじめに

先に「三輪山伝説と大三輪氏」(『久里』42、神戸女子民俗学会、2020年10月刊)を論じた時、大三輪氏はどこまでも「大三輪氏」であって、「大神氏」ではないと考えた。それは氏名というものはその職務や住地によってつけるというからである。これを語る事例に韓国連源の氏名変更の記事があるので紹介したい。『続日本紀』巻第40の延暦9年(790)11月壬申条(10日)の記事である。

外従五位下韓国連源からくにのみちのくちら言さく、「源らは是れものべのおほむらじべうえい物部大連ものべのおのをるらが苗裔なり。夫れ物部連らは、各居地おののをると行事おののをるとに因りて、別れて百八十氏と為る。是を以て、源らが先祖塩児しほこは、父祖使ふそつかひを奉けたまはれる国の名を以てす。故に物部連は韓国連くわんこくを賜はる。然れば、大連の苗裔は是れ日本の旧民にして、今、韓国と号するは、還りて三韓さんかんの新来しんらいに似れり。唱導しやうどうするに至りて、毎に人の聴きを驚かす。地に因りて姓を賜ふは、古今こきんの通典つうてんなり。伏して望のぞまはるは、韓国くわんこくの二字ふたごを改めて高原たかはらを蒙り賜はらむことを」とまうす。請こひに依りてこれを許す。

というものである。物部氏の場合として、ここには「各居地と行事」によって先祖は韓国の姓を名乗った。私、外従五位下韓国連源も本来は物部氏であったが、先祖塩児が父祖が従事したという韓国にたいする外交官としての名誉の氏名がつけられた。ところが、奈良時代末の今になって、大勢の朝鮮の人が帰化してきたので、その方々とごちゃごちゃになり、間違われたりするので、今、住んでいる日向国の曾於郡高原の地名によって高原という氏名にしたいと申請したという記事である<sup>(1)</sup>。

この点からすると、いくら「大物主神ノ五世孫太田々根子」だといっても、氏名を大神とするのはすこし変で

ある。氏名としては地名からとすると、『大和志料』がいうように、三輪の地の住人なので、三輪氏というのが順当なところである。もっとも、大三輪氏も職業としては大神神社を祀る人であったところから、大神を氏名としたということになる。それにしてもまずは土地の名前をとって、大三輪氏という氏名を名乗るのが順当である。神社も大三輪神社というべきであったのではないか。このように考えるのは、「筑前国風土記」逸文の「大三輪神」の次の記事があるからである。

筑前つくしのみちのくちの国の風土記に曰はく、氣長足姫尊おきながたらしひめのみこと、新羅を伐たむと欲して、軍士を整理いりざへて発行いでたたしし間に、道中みちなかに逃げ亡せき。其の由を占うらへ求もとぐに、即ちすなはち、崇たる神あり、名を大三輪おほみわの神と曰ふ。所以ゆゑに此の神の社を樹たてて、遂に新羅を平なげたまひき。

とあるものである。三輪氏が天皇の寵臣であっただけ、この資料は天皇家内において軍事を担当した氏族の語る話であったことになる。三輪氏は軍事力を持っていた。そして、北九州において大勢の豪族からも信頼されていたということを、この記事は示している。崇る神といひながら、大三輪の神はその存在を示しているのである。このことがあればこそ、大神おほみわのしも 栲田朝臣たけだが登場し得たのである。神功皇后摂政前紀の仲哀9年9月己卯(10日)の条に、船舶ふねを集つどへて兵甲つはものを練ねらふ。時に軍卒ときども集いひ難がたし。皇后の曰はく、「必ず神みことの心こころならむ」とのたまひて、則ちおほみわのやしろたをたて、刀矛たちほこを奉たてまつ。軍衆いくさびと自づからに聚る。

とある記事が、このことをよく示している<sup>(2)</sup>。

それにしてもなぜ「三輪」とあるべきものを「大神」と書いたのが本当に不思議である。そのところを検討していきたいと思う。

これを理解するのに格好の材料がある。それは『日本

# 日本列島における<sup>うまやさる</sup>厩猿信仰の起源と 『言談抄』所引の『齊民要術』

田島 公

## 要 旨

日本列島には厩の隅に猿を飼う厩猿と呼ばれた習俗があり、馬の無病息災などを願う信仰も発生した。厩猿に関しては柳田國男・南方熊楠・石田英一郎の古典的な研究に始まり、絵巻物に画かれた厩猿の姿、厩に遺された猿の骨のDNAの研究の他、近年では発掘された奈良時代の絵馬に画かれた厩猿が紹介されるなど、研究に深まりを示している。本稿では厩猿の研究や関連資料を再確認した後、大江匡房撰『言談抄』所引の『齊民要術』を糸口に、同書巻6第56「養<sub>レ</sub>牛・馬・驢・騾<sub>一</sub>」の「此三事、皆令<sub>レ</sub>馬落<sub>レ</sub>駒<sub>一</sub>」に関連する「術曰、常繫<sub>レ</sub>彌猴於馬坊<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>馬不<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>辟惡<sub>一</sub>消<sub>中</sub>百病<sub>上</sub>也」という記述に注目し、日本列島における厩猿の起源を遣隋使または遣唐使が齎した『齊民要術』の上記の記載内容か、渡来系馬飼集団が伝えた現存中国最古の農業書『齊民要術』に集約される馬の飼育・繁殖と猿に関する知識に基因する可能性が高いことを示した。

【キーワード】厩猿 「河童駒引」 大江匡房 『言談抄』 『齊民要術』 江家文庫 渡来系馬飼集団

### はじめに 一厩猿に関する主な研究一

厩（馬屋）の隅に猿を飼うという習慣・習俗、更にそこから発展して厩に猿の頭骨や手骨を祀ることにより、厩の火災防止、馬の無病息災、五穀豊穡などを願う信仰は厩猿信仰と呼ばれている（中村 2004・2010）。猿の絵を描いた絵馬やお札を魔除けとして厩に貼る場合もある。また、馬の無事と無病息災を祈って、神馬（神が騎乗すると信じられ神社に奉納された馬）を収納する神社では、馬の無事と無病息災を祈って、厩に猿の彫刻が彫られたり、馬を曳く猿の像が置かれたりしている。例えば、神格化された徳川家康（東照大権現）を祀る日光東照宮（栃木県日光市）の「神厩舎」には、長押に有名な「三猿」（見ざる・言わざる・聞かざる）など猿の彫刻がなされた厩舎の中に白馬が日中の一定の時間に繋がれており（飯田 2009）、相模国一宮の寒川神社（神奈川県高座郡寒川町）の「神馬舎」には、猿が神馬の手綱を曳いている装束を纏った彫像が奉納されているという。

猿や馬に関するこうした関係について、動物生態学的に三戸幸久氏は、なぜ猿と馬と相性が良いのかに関して以下のように説明している（三戸 2004）。（下線は田島）

馬を飼っている場所で生きたサルを飼うということがどういうことなのかといいますが、ニホンザルはご存じのように肉食ではなく草食です。有蹄類の馬や牛にとってはサルは害がなく、一緒に飼っていると相性が良く、サルが横にいると馬や牛が非常に

安心するというのです。

野生状態でサル類と馬は生息環境が違いますが、鹿とかイノシシといったものとの関係をみますと鹿や猪はサルの生態をうまく利用しているのです。というのは、サルの群れは木から木へ飛び移りながら木の実を食べていくわけですが、たくさん食べかけの実を落としますし木を揺すれば実が落ちます。すると地上で生活しているイノシシや鹿は、それら落ちてくるおこぼれを食べて歩くのです。これはなかなか得難い食料なのです。

同時に、樹上で異変が起これば危険信号となって鹿やイノシシも逃げます。逆に地上での肉食獣の接近は樹上にいるサルへの警戒警報にもなるといった、お互いの信号、情報が共有、利用できるわけです。そういう意味で信頼関係が生まれやすいといえます。

広島県宮島のニホンザルでは鹿の上に乗って毛づくろいまでします。のみ取りまでしてくれます。しかもサルに対しては安心しています。こうしたことから草食獣であるサルと馬、牛などの関係も同様に容易に信頼関係が築かれるものと思われる。

このように考えると厩にサルをおくというのは、非常に有用で効果的なサルの利用方法であり飼育風習です。それがいつのまにか信仰となって、サルは馬や牛の守り神と考えられるようになったというわけです。

# 飛鳥川上流の村落の宮座

—高市郡明日香村稲渕・栢森のカンジカケ（綱掛）の意味するものと宮座—

浦西 勉

## 要 旨

飛鳥川上流の明日香村稲渕、栢森で、正月に、集落の入り口に掛けられる大綱（カンジョ）の意味を考察した。稲渕は一月第二日曜日に飛鳥川をまたいで大綱の掛けられ、綱の中央に男性のシンボルが吊られる。栢森は一月十一日やはり飛鳥川をまたぐように綱が掛けられ中央に女性のシンボルが吊られ、いずれも関心が持たれている。この綱掛の存在の解釈を試みた。結論として、飛鳥川上坐宇須多伎比売神社（かつては宇佐八幡と言う）の観音堂で行われていた正月行事の修正会の残存であると考えた。またこの修正会を行った宮座の構成と変遷を考察した。

【キーワード】 宮座 修正会 オコナイ 綱掛 カンジョカケ 飛鳥坐宇須多伎比売神社 明日香村稲渕 栢森 入谷 畑 畑庄

## はじめに —飛鳥川最上流の村落—

「石舞台」のある島之庄から祝戸の集落を通って南に向う道がある。この道とほぼ平行に飛鳥川が源流へとさかのぼってゆく。この道を川沿いにゆくと最初の集落が稲渕である。稲渕の集落に入るまで、飛鳥川の両側に美しい棚田をみることができ、いかにも収穫時期には村の名である稲の渕という景観になりそうな風景である。稲渕の集落に入るところに、飛鳥川をまたぐ長い大きな縄が吊られている。これはツナとか、カンジョウナワと呼ばれているもので、このツナの中央に男性の陽物が吊り下げられている。ここを通ると、集落で、家々は東南にまとまってならんでいる。村はずれに、飛鳥川上坐宇須多伎比売神社が鎮座する。その前のカーブを曲ってなお上流にゆくと、開けた水田があり、しばらくして栢森村領に入る。そこにも、飛鳥川をまたぐ長いしめ縄が吊り下がっている。ここには女性のシンボルと村人が言う、丸い形の藁塊が中央に吊られている。ここを通過すると栢森の集落が目に入る。栢森の集落は川音がひとときわ高く響く。この場所は、奥の入谷の集落からと畑の集落からと芋峠（吉野へゆく峠）からの3カ所の谷から集った水が合流しているためである。栢森を通り、急な坂を登ってゆく。途中、やはり棚田が美しい。しばらくすると入谷の集落である。集落の周囲は陽当りの良い畑地であり、家も点々と存在している。一番北の谷は畑の集落へ深く入りこんでいく。今日、畑の集落には細川から入る道がある。かつて祝戸・稲渕の中ほどに山路がありそれ



図1 飛鳥川上流の概略地図

# 遺跡・遺構移設保存考

—史跡の現地保存の原則に反する事例—

建石 徹

## 要 旨

史跡の現地保存の原則に反する事例のうち、きわめて重要な政治的判断により移設保存がなされた事例（ヌビア遺跡群・新田原古墳群）、保存上の判断により移設保存がなされた事例（飛鳥京跡苑池・合戦原遺跡）の経緯や現状を整理した上、一時的な措置とはいえ保存上の判断により壁画等の移設保存がなされている高松塚古墳・キトラ古墳にかかる課題・展望を論じた。

史跡の現地保存の原則は今後も踏襲すべきであり、その実現に向けた研究・実践は一層深められるべきと考えるが、一方で、特に保存上の課題により現地保存が困難な状況にある史跡・遺跡について、現地保存の原則のみで対峙することは危険であり誤りであることを、斯界や社会に説明し共有することが必須と考える。

【キーワード】ヌビア遺跡群 新田原古墳群 飛鳥京跡苑池 合戦原遺跡 世界遺産「飛鳥・藤原」

## はじめに

史跡<sup>(1)</sup>を構成する各要素を現地で一体として保存することは、日本を含む国際社会に共有された原則（以下、史跡の現地保存の原則）であるが、様々な経緯や理由により、それが実現できない場合がある。これらの多くは「忸怩たる思い」や「苦渋の決断」等の言とともに、次善の策として、いわば消極的な対応として現地保存の原則に反する対応が実施された（せざるを得なかった）ものであるが、少数ではあるものの「積極的な」対応<sup>(2)</sup>として実施されたものも含まれる。

本稿では史跡の現地保存の原則の考え方や枠組みを整理した上、この原則に反する興味深い事例のいくつかを紹介、考察しながら、今後を展望する。

本稿執筆の前提として、筆者自身は、史跡の現地保存の原則を、原則としては覆す必要は一切ないと考えていることを明記しておく<sup>(3)</sup>。

なお、朽津信明による近年の研究は本稿の視点と重なるところもあり、参考となる（朽津 2021）。あわせて参照されたい。

## 1 史跡の現地保存の原則

史跡の現地保存の原則は、文化財保護法（1950年）あるいはこの文化財類型にかかる旧法である史蹟名勝天然記念物保存法（1919年）の中で明記されたことではない。現在にいたる文化財保存・修復の国際的な理論的支柱

として、長くイタリア中央修復研究所長の地位にあったチューザレ・ブランディは、その主著『修復の理論』の中で、

1. モニュメントが作られたところではない場所に、モニュメントを解体してから再構築することの絶対的な不当性。
2. モニュメントは解体されほかの場所で再構築されると、同一の材料を用いて作られたそのものの自体の偽造に格下げされる。
3. 他の方法では救済できない場合、かならずやモニュメントが作られた歴史的場所にだけ関連を持ちながら、偏にモニュメントの保護だけを旨とせず解体や再構築をすることの正当性。

と論じた（Brandi 1963、小佐野 2005）。

世界文化遺産は、土地や土地と一体となった物件、すなわち不動産が対象とされ、そのことは世界遺産条約（1972年）には明記されていないものの、その第1条には文化遺産の定義として、記念物・建造物といういずれも本来は不動産である類型が示されている<sup>(4)</sup>。世界遺産履行のための作業指針には、真正性（Authenticity）の条件として、「形状・意匠、材料、用途・機能」等とともに「位置・セッティング」が示されており、これにより史跡を含む記念物と建造物の現地保存の原則が謳われている。

イコモス（ICOMOS 国際記念物遺跡会議）が採択し、現在でも効力を有するヴェニス憲章（1964年）では、記念物・建造物は現地保存されることが原則とされ、保存